ありがとう。の一言

香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありがとう。の一言

【Ｎコード】
Ｎ４４２６Ｂ

【作者名】
香

【あらすじ】
クリスマス・イヴの夜、内気な僕（藤重翔太）の前に不思議な化け猫が落ちてきた。化け猫は翔太や翔太の家族に愛や夢、そして希望を次々と与えていく。

第1話　雷雨の中で

それは、５年前の１２月２４日。クリスマス・イヴの夜の出来事だった。

君は突然僕の前に現われたんだ。

恋人たちが甘い夜を過ごす聖なる夜。

子供たちはサンタからのプレゼントに心踊らせ胸膨らませているのだろう。

街を彩る赤や緑の電飾にクリスマスソング。

当時、内気な１６歳の僕にとっては関係なかった。

その日はホワイトクリスマスどころか、朝から生憎の豪雨。昼を過ぎる頃には雷雨に変わっていた。

青白い閃光が一瞬視界を明るくし、ゴロゴロと雷鳴を轟かせて、下界の人間たちを恐怖に陥れようようとしている。

“ざまぁみろ”と心の奥に潜む、もう一人の僕が毒づいた。

それは、クリスマスというイベントを謳歌している全ての人間に向けて吐いた言葉だった。

学校は今日から冬休みに入り、僕は朝からずっと部屋に閉じこもりっぱなしだった。昨日、友達から借りたＲＰＧゲームに夢中になり過ぎて昼食さえもとり忘れていた僕は、腹がぎゅるぎゅる鳴って、

その腹の虫に催促を受けながらチラリと時計に目をやると、時計の針はちょうど午後６時半を指すところだった。

もうそんな時間か……と僕は冷えた階段を下り、明かりのない静かな居間におりた。

窓の外は相変わらずの雷雨で、時折照らす雷光が暗くなった部屋を明るくした。

居間は１２畳程の広さで狭い台所と繋がっている。

うちは３人家族だから、４人掛けの茶色い木製のテーブルセットはいつもどこかに空席がある。部屋の一隅には真新しい薄型の液晶テレビがあるが、あまり活用されてない。その前には膝丈と同じ高さのガラステーブルとそれを囲むようにクリーム色のソファが配置されているが、大体僕が座る位置は決まっているから、こんな大きなソファはいらないと思う。

南向きの透明なガラス戸の向こうには土肌むき出しの小さな庭があり、降り止まない雨のせいで大きな水溜まりができていた。

昔はそこで犬を飼っていたこともあったけど、今は……姉ちゃんが、天気のいい日に洗濯物を干すためだけの場所になっている。

僕はそんな庭に見向きもしないで、何か食べる物はないかと冷蔵庫を覗き込んでいると、玄関からがさがさと物音が聞こえてきた。おそらく姉ちゃんが帰ってきたのだろう。

大体こんな時間だから確認するまでもない。数秒遅れて“ただいまー”と姉ちゃんの疲れた声が聞こえてきた。

そして更に遅れること数秒、居間に入ってきた姉ちゃんの姿は、哀れな濡れ鼠状態。頭の先から爪先まで全身びしょ濡れだった。

僕は冷蔵庫から出したコーラを飲みながら、そんな姉の姿に冷ややかな視線を送る。

「悲惨だな」

「ほんともう最悪〜。途中で傘、折れちゃってさ〜」

僕に言っているのか独り言なのかブツブツと小言をいいながら、家の近くにあるスーパーのビニール袋をドサドサと雑に置き、洗面所へと消えていった。

「姉ちゃーん、お腹すいたー」

僕はソファにすわりながら、洗面所にいる姉ちゃんに自分の欲求だけをぶつける。これもいつものことだ。“お帰り”も“お疲れ様”もない。

そんな僕の無情なセリフに姉ちゃんは透かさず居間に戻ってきた。

「とりあえず、着替えさせてよ！」

姉ちゃんはドンドンと足音を大きめに立てて、2階へと階段を上っていった。

まぁそりゃそうだろう。無惨に傘が折れようともきちんと夕飯の買い物を済ませ、どんなに疲れていようが夕飯の支度をしなければならない姉に、この弟は哀れむような一瞥をくれただけ。労いの言葉をかけるわけもなく、タオル1枚も差し出したりはしない白状極まりないこの弟に、姉は憤慨するのも当然だ。

この家に母親はいない。僕が3歳の時に事故でなくなっている。

僕が知っているのは写真の中の母親だけだ。
母親がいなくなって、家事は5歳年上の姉の役目となった。それが当たり前になってて、この頃の僕は姉ちゃんの苦労などまるで分かっていなかったんだ。

「もうっ！　カーテンくらい閉めてよね！　内が丸見えじゃない！」

2階から下りてくるなり姉ちゃんの小言が始まった。

「はいはいはいはい」

僕はこれ以上小言を言われては堪らんと、即座にカーテンを閉めた。丸見えと言っても庭を挟んだ隣の家は2年前から空き家だから、見られる心配はいらないのではと僕は思うのだけど、姉ちゃんはそれ以上の小言は言わなかったので僕も何も言わずにおいた。

「鍋でいい？」
「うん」

鍋か……姉ちゃんもクリスマスは関係ないようだ。

夕飯に有り付いたのは7時半。
激しく降り続ける雨が窓を叩き、雷鳴の威力は増していく一方だった。

「今の（雷）、近くに落ちたんじゃない？」
「そうかもね」

姉ちゃんはドーンという轟音と振動にビビッている様子だ。

そして食事を済ませ、後片付けしていた姉ちゃんがふと思い出したかのように言った。

「あっそうだ、ケーキ買ってきたのよ。ほら今日はクリスマス・イヴだからさ。一人寂しく留守番してる弟を不憫に思って買ってきてあげたんだからね」

姉ちゃんは雷からくる恐怖を振り払うかのように明るく振る舞っている。あからさまに僕に対する皮肉を織り交ぜながら……。

勿論、僕も反論する。

「姉ちゃんだって同じだろ。イヴを過ごす相手もいないのかよ」

すぐに反撃が返ってくるだろうと僕は構えていた。けれど姉ちゃんは口籠もってしまい“うるさいわね”と動揺を見せながら、冷蔵庫から雨に濡れた白い箱を出すだけで、会話は途絶えた。

あらら、もしかして地雷踏んじゃっかな……？

箱の中にはカットされてある苺のショートケーキとチーズケーキが2つずつ入っていた。

どうやらケーキは雨に濡れずに済んだようだ。

天候最悪、イベントごとなど関係ない姉弟二人、せめてケーキだけでも美味しく頂きたいものだと、ケーキを皿に移した――その時だった。

一瞬目の前が真っ暗になったのだ。

――停電だ。

そして、一寸の時間を待たずしてズトーンという耳が痛くなるような爆音と、立つに耐えれない揺れに、僕は即座にテーブルの下に身を伏せ警固した。

姉ちゃんもキャーと悲鳴をあげながら、僕と同じ態勢をとっている。

地震か！？

雷が落ちたのか！？

車が突っ込んできたとか！？

一体何が起きたんだ！？

感じたことのない恐怖で、意識すればする程、心臓の音は次第に早く大きくなっていく。

その胸の早鐘が僕の全身に“危険だ”と警告してくるのだ。

「あれ……な、に？」

消え入りそうな姉ちゃんの声に、なんだよ？　と不吉な予感を感じながら姉ちゃんを窺う。

姉ちゃんはカーテンの奥を指差していた。その指先は震えている。

その震える先を僕は恐る恐る目で追った。

そして僕は目を見張る。

青白く眩しい雷光が不規則に庭を照らし出し、そこにあるはずのない不気味な影を生み出していたのだ。

な、なに……あれ……

ただならぬ不気味な情景に、僕はテーブルの下で固まった。
見なかったことにできればどんなに気が楽か……。
現実逃避は僕の得意分野だが、それも今はできそうにない。
姉ちゃんが顎をくいくいっと突き出して“あなたが行きなさい”と眼で訴えてくる。

僕だって恐いよっ！

と目で訴えながらも、姉ちゃんに押し切られた僕は恐る恐る一歩ずつカーテンの前まできた。
ゴクリと唾を飲み込んで、僕も男だと覚悟を決めた。
そして一気に左右両手一杯にカーテンを開らいた。

――は！？

な、な、なんなんだコレは！？

僕の眼に飛び込んできたものは、衝撃の光景だった。

その大きさは一般車両と同じくらいであろうか。
しかし、濃い灰色の円い鉄の塊は、自動車とは異なった形をしていた。
僕はソレに似たものを知っている。
それは、いつか観たＳＦ映画の中で“ＵＦＯ”と呼ばれていたモノだ。

庭に大きな穴をあけたソレは、黒い煙を出しジジジっと漏電の音

を漏らしていた。

姉ちゃんはテーブルの下から出てこない。

そして、部屋の灯りが一斉に復活した時だった。

激しく吹き付けてくる雷雨の中を、虚しく佇むソレが動いたのだ。

キィーと鉄が擦れる音と共にソレの蓋が開いた。

そして、そこから出てきたのは――――大きな猫だった。

第2話　化け猫は宇宙人

全長約2メートル。白い毛並みの身体に所々に茶色の斑模様。三角の耳がピンと立ち、少し上がり気味の眼が2つ。黄色く光る大きな瞳がギラリと僕と姉ちゃんを映している。

驚くことに、その巨大な猫は二足歩行だった。

例えば、この場が遊園地やデパートの催し場で、手には赤い風船を持っていたならどうだろう。ウサギやパンダの着ぐるみのように親しみを感じれたかもしれない。

だが現状は、雷雨吹き荒れる夜8時過ぎの暗闇漂う家の庭。

激しく吹き付ける雨音だけが、その場を支配していた。

「化け猫」

沈黙を破り、姉ちゃんが消え入る声で言った。

その声は、恐怖で言葉を失った姉ちゃんが、喉の奥から搾り出した必死の叫びだった。

その化け猫は暫くピクリとも微動だにせず、ただただ雨風に打たれていた。

勿論僕と姉ちゃんだってその場から動けず、石化状態。

西部劇さながらの決闘シーンのような緊迫した空気が漂って、お互い向かい合いスキを伺っている感じだった。

そして、先に動いたのは化け猫の方。

人間のように後ろ足だけでゆっくりと歩き、間合いをつめてくる。

ガラス戸の前にいた僕は迫りくる化け猫に驚倒し2、3歩後退した。

――襲われる！！

僕は恐怖で足が縺れ、へっぴり腰になり、しまいには尻餅をついてしまうへたれ具合い。

テーブルの下で恟恟としていた姉ちゃんが“翔太！！”と僕の名前を呼んで、傍へと駆け寄ってくる。そして僕の身体を支えるように両肩に手をおいた。その手の震えは先程より酷い。

――ドンドン　ドンドン

ただでさえこの不可思議な状態に頭も躰もついていけてないのに、あの化け猫は僕たちの恐怖を煽るように両手（＝前足）でガラス戸を叩きだした。

雷恍が轟く度に化け猫の輪郭が浮き彫りになる。

――ドンドン　ドンドン…

化け猫はひたすらにガラス戸を叩き続けていた。

そして僕が化け猫を警戒深く眺めていると、妙なことに、その姿からは殺意が全く感じられないことに気付いたのだ。

なに……？

その不可解な化け猫の行動に、僕は再びガラス戸の前まで歩み寄った。

「翔太！！」

と姉ちゃんの止める声を振り払い、僕は化け猫とガラス戸を挟んで向かい合う。その距離３０センチ。

大きな黄色い瞳には、僕の姿がくっきりと映りだしている。だがそれも束の間で、それは次第に歪んでいった。

「こいつ、泣いてる……」

吹き付ける雨のせいか、それとも涙なのか。次々と溢れ出てくる水液は、まさしく涙だった。よく見てみれば、その大きな身体は小刻みに震えていた。

この日は１２月２４日。外は止む気配をみせない雷雨。気温４度。全身で雨風を受けた身体は凍えていたのだ。

「内に入れてあげようか？」

「駄目よ！　噛みつかれるわよ！」

姉ちゃんの鋭い指摘に化け猫はブルンブルンと首をがぶり振る。

どうやら化け猫は人間の言葉を理解できるらしい。

僕は捨て猫を拾うような感覚で鍵を外し、戸を横に引き化け猫を招き入れた。

冷たい雨風と共に、大きな躰の化け猫がのっそりと入ってくる。

姉ちゃんは一気に距離をとった。

僕は……なぜだろう？

不思議と恐怖を感じなかった。

緊張はしてたけど……。

化け猫は内に入るなり、ブルブルっと全身を振り、身体に染み込んだ雨水を吹き飛ばした。

おかげで一気に床は雨水で水浸しになり、傍にいた僕の身体も化け猫が飛ばした水飛沫で見事に濡れた。

「姉ちゃん、タオルタオル！　早く！」

数メートルの距離を保ちながら化け猫の動作を食い入るように観察している姉ちゃんにタオルを持ってくるよう促すと、姉ちゃんは僕の声にハッとして、コクコクと頷き、洗面所へと猛ダッシュで走っていった。

「ありがとう」

僕は耳を疑った。

え？？　今なんて言ったの？

化け猫の発したその声は、人間と同じ成人男性の声音。優しくて落ち着いた、耳心地の良い声色だった。

確かに言った。

化け猫は僕の眼を見て、
「ありがとう」
と言ってくれたのだ。
その優しい声色は僕の緊張を解いてくれた。
――こいつ、いい奴かも。

バタバタとスリッパの音を立てて、両腕にたくさんのバスタオルを抱えながら姉ちゃんは居間へと戻ってきた。
そんなにタオルはいらないよってツッコミを入れたくなる程のタオルの量に、姉ちゃんの動揺が伺える。

「こいつ、今しゃべった」
「は？」
「だから、しゃべったんだって！　『ありがとう』だって。人間の言葉話せるの？」
僕は化け猫にバスタオルを手渡し、見上げた。
「はい、少しだけ」
バスタオルで身体を拭きながら化け猫が答える。
姉ちゃんは驚嘆し、ストンとソファに腰を落とした。
どうやら腰が抜けたらしい。

きっと姉ちゃんも化け猫の穏やかな優しい声色に、安堵し緊張が抜けたのかもしれない。
僕は水浸しになった床と化け猫の躰を拭いてやった。

姉ちゃんがすっかり落ち着きを取り戻した頃、クリスマス・イヴを襲った雷雨の威力も徐々に弱まりつつあった。

化け猫はガラス戸の前に茫然と立ち尽くしている。
雨に濡れ、無残な姿になった宇宙船を悲しそうに見つめていた。
僕も隣に立ち、歪んだ宇宙船に視線を落とした。

「壊れちゃったね……」
「はい」
「あのさ……訊いていいかな？」

訊きたいことはたくさんある。
化け猫は何者なのか。
何処から来たのか。
なぜこのような事態になったのか。

その疑問を訊ねると、化け猫は言葉を選びながら丁寧な口調で語ってくれた。

化け猫は、遥か遠い宇宙にある銀河系の星から来たのだそうだ。
その星の名前は、わからない。というか、名前はない。“名もなき星”というやつだ。

地球には自然環境や人間観察、地球生態の調査に来たとのこと。
断じて、地球を侵略したり人間を襲撃したりはしないと強めに主張した。

庭に佇む無残な形になった鉄の塊は小型宇宙船と呼ばれ、それとは比にならない規模の大きな宇宙船を母船と呼び、地球にはその母船で来たとのこと。
その母船には多くの仲間が乗船しているとのこと。
彼らには各自役割があって、小型宇宙船は各自1機ずつ与えられていることを話してくれた。

つい先程も任務を終え、母船に戻る途中だったらしい。
低く黒い雷雲が永遠に広がる荒れた夜空を、猛スピードで走らせていた時、雷雲から落とされた雷柱が運悪くあの小型宇宙船を射ぬいたのだった。

一瞬にして小型宇宙船は失速していき、操縦席にはビリビリと静電気が走って、船内の壁には細長く青白い閃光が蛇のように這い回る。
操縦不能になった小型宇宙船は糸が切れた凧のようにフラフラと落下していき――今に至る……と、そこまで話してくれた。

「それで君は落ちてきたんだ……」
「はい」
「これからどうするの？」
「修理します」

「あんなになっちゃったのに、直せるの？」
「……。とりあえず、修理してみます」
「そっか」

「……あの、それで……お願いがあるのですが……」
「なに？」

「とても厚かましいお願いなのですが……、暫くここにおいてもらえないでしょうか？」

化け猫は哀願の眼差しを僕に向けてきた。
僕は快諾したかったけど、姉ちゃんの返答を待つように顔色を窺った。簡単に化け猫を拾ったはいいけど、僕一人で面倒見切れるかといえば、そんな自信はなかったから。

姉ちゃんは少し考えて、

「そうね……、アレをあのままには出来ないし、あなたも危害を加えるような人（？）には見えないし……うん、いいよ。おいてあげる」

庭に佇む宇宙船にチラリと視線を動かし、仕方ないわねと微笑した。
それは化け猫が現れてから初めて見せる姉ちゃんの笑顔だった。
――こうして僕たちは、化け猫の姿をした宇宙人と生活を共にすることとなったのだ。

第3話　名　前

化け猫と暮らし始めてから数日が経った。

朝、目が覚める度に夢じゃないかと思う。

僕が寝呆けた顔で居間に下りると、化け猫が庭に出て宇宙船の修理に励んでいた。

大部分は青いシートで覆われている。よく殺人現場後に見られる視界を塞ぐための青いビニールシートだ。

姉ちゃんが先日、人に見られてはいけないと、ホームセンターで買ってきたのだ。

化け猫が来て初めての朝、僕たちの朝食を用意した姉ちゃんは、すでに仕事に出ていた。

食卓には僕の朝ご飯、トースト2枚とサラダが置いてあって、その隣には化け猫の朝ご飯らしきツナ缶が1つ置いてあった。

猫だけに、ツナ缶？

人間の食事を秘かに楽しみにしていた化け猫は、そのツナ缶を見て暫し固まっていた。

僕はそんな化け猫を見て苦笑い。

上手にスプーンで掬ってツナ缶をちまちま食べてるその姿は、なんだか惨めで、でもなんだか笑えて、いつ思い出してもおかしくな

る。
天然な姉ちゃんに感謝だ。
その後、僕が食べるトーストを羨ましそうに見つめるから、1枚あげた。
化け猫は嬉しそうに口に頬張り、地球食のすばらしさに感激しきりだった。たった食パン一枚でそこまで感激されるとなんだか僕も嬉しい。こんなに楽しい食事は久しぶりだった。
大体一人で食べることが多かった僕にとって、その日の事は忘れられない大切な思い出だ。
その日から、姉ちゃんは一人分多めの食事を作ることとなった。

『これは何？』
『今のどういう意味？』

と、見るもの聞くもの全てが新鮮らしく、たくさんの疑問質問を投げ掛けてくる。
その度に僕と姉ちゃんは言葉を選びつつ丁寧に説明してやった。
化け猫は真剣に僕や姉ちゃんの解説を聞き、すぐに理解した。
決して同じ質問はしない。

どうやら化け猫は優秀な宇宙人らしい。

言葉を憶え始めた赤子のように純粋で、次から次へと多くのことを吸収していった。
君の純粋さは僕の心を擽った。
その純粋さが眩しくて羨ましかった。
礼儀正しく挨拶をし、仕事から帰ってくる姉ちゃんに労いの言葉を口にする。

“頂きます”も“ご馳走様”も、化け猫の口から聞いた時はビックリしたもんだ。そういう変な知識だけは持っている。

そしていつの間にかこの僕も、仕事帰りの姉ちゃんに、『お帰り』と自然に口にしていたのだ。

「どう？　修理できそう？」

「はい。とりあえず母船と連絡をとれるように無線機を修理してみます」

庭に出ると寒い北風が身体を通り過ぎる。

「寒っ……」

僕は身体を縮めた。

「そうですか？　こんなにいい天気なのに」

化け猫は青く澄み切った空を仰ぎ見た。太陽の光が眩しくて目を細めた横顔は、まさに縁側で日向ぼっこをしている呑気な飼い猫の顔だった。

ピンク色の鼻先、その横には細長い3本の髭が左右に蓄えられ、白い毛皮で覆われたその顔は誰が見ても猫そのものだ。

けれど、その大きな身体と仁王立ちしたその様は猫ではないと否

定している。

そう、君は宇宙人なのだ。

その日の夜、僕は肝心なことを訊いていないことに気がついた。

姉ちゃんは台所で夕食の支度をし、僕らはソファでテレビを観ながら夕飯が出来上がるのを待っていた。

「ねえ、名前なんていうの？」

「なまえ？」

「そう。な、ま、え。僕の名前は藤重翔太。君も親に付けてもらったでしょ？」

「名前はありません。私の星にそういう習慣はありませんから」

「じゃあ親や友達から君はなんて呼ばれてるの？」

「う〜ん……」

そんなに難しい質問をしたつもりはないのだが、君は右手を頬にあて暫らく考え込んでしまった。

なんで？　初歩的な質問でしょうが！

台所から姉ちゃんが“ご飯よー”と僕たちを呼んだので、ソファから食卓へと場所を移した。

今日の献立は炒飯と餃子、野菜スープにトマトサラダだ。

いつもなら姉ちゃんに『これは何という料理ですか』と興味津々に訊いてくるのに、化け猫は上の空だ。

さっき、僕が投げ掛けた質問の答えをまだ出していないから頭を悩ませているのだ。ほんと純粋で生真面目なやつ。

「ねぇ、食べようよ」

見兼ねた姉ちゃんが言った。

「――さんばんめ」

「え？　3番目？」

「はい。両親から“3番目”と呼ばれています。私には2人の兄がいます。私は3番目に産まれてきたので両親は3番目と呼びます」

「……変なの」

「仲間たちは私のことをいろいろな呼び名で呼ぶので、名前は何かと問われると困っちゃいますね」

つまり、名前はないわけか。

「ねぇ、名前つけてあげようか！」

僕は正面に座っている姉ちゃんに提案した。

「そうだね。名前、何にする？　ミミとかタマとかは在り来たりだから嫌だなー」

いやいや、こいつは猫みたいだけど猫じゃないから！

と、僕は胸の奥でツッコミを入れる。

「白(シロ)は？」

姉ちゃんがまた一つ名前を出した。

「シロ～？　なんか犬みたいじゃんかよっ」

「えー、いいと思ったんだけのなー。純粋純白の白！　私は、お似合いだと思うんだけどな～」

確かに、名前の由来は悪くない。僕は化け猫の顔を品定めするように眺めた。化け猫も澄んだ瞳で見つめ返してくる。

うーん……シロか～。

ふと僕の脳裏にひとつの名前が浮かんだ。

「じゃあ白(ハク)にしよう！」

「はく？」

「純白の白(ハク)だ。シロよりはましだろ？」

「白か……いい名前ね」

こうして化け猫の名前は白に決まった。

白は恥ずかしそうに照れ笑いする。

「翔太さん、“姉ちゃんさん”ありがとう」

白はまた僕に“ありがとう”を言った。

「やだ、私の名前は綾香よ。姉ちゃんって名前じゃないわ」

僕が姉ちゃん、姉ちゃんと呼んでたからだ。

「いいじゃん、姉ちゃんって呼べばいいよ」

「あんたが言う台詞じゃないでしょ！

でも、姉ちゃんって呼んでくれても構わないわよ。勿論、名前でもいいし、白の呼びやすい方で呼んでね」

「僕のことも翔太って呼び捨てでいいよ。さん付けで呼ばれたことないし、なんだかこそば痒いしさ」

「こそばかゆい？」

白が首をかしげる。

「くすぐったいって意味」

それでも白は首をかしげていた。

僕と姉ちゃんは、そんな白を見て笑い合って、白はますます分からないというような顔をする。

笑いながら食卓を囲むようになったのも、白がきてからだった。

こうして僕と姉ちゃんは化け猫のことを『白（ハク）』と呼び、白は僕のことを『翔太』と姉ちゃんのことを『姉ちゃん』と呼びあうようになった。

その次の日。

庭から聞き覚えの無い音が僕の胸を騒つかせた。ピピーッと鳴る音はモールス信号に似ている。

「母船からかもしれません」

白は音のする庭に出ると、青いシートの下にある宇宙船へと潜っていった。

聞き耳をたてたところで聞き取れない宇宙語が漏れてくるだけで僕にはなにがなにやらさっぱりだ。

ただ、急に寂しくなった。

もしかして、帰っちゃうの！？

せっかく仲良くなれたのに？

名前だって呼び合える仲になったのに？

そんなのいやだ！

まだ、行かないで！！

僕は胸の奥で必死に叫んでいた。

いつか居なくなることは分かっている。仕方のないことだ。

仲間と離れ離れになって、どんなに心細い思いをしていることか……。

それでも、それにしても、早すぎるよ！！

そんな僕の自分勝手な嘆きなど知るはずもない白が、申し訳なさ

そうな表情を浮かべながら家の中へと戻ってきた。

「あの……」

白は上目遣いで何か言いたげだ。

「白、帰っちゃうの！？」

思わず、白に詰め寄る。

「それが……母船も雷の被害を受けたようで……、修理のために一時、星に帰ってしまったみたいでして……そのー」

白はその先をなかなか話さない。モジモジ、モゴモゴとなんだかはっきりしない態度だ。

「なに？　言ってよ！」

僕は苛立ちを顕にして、その先を催促した。

「……暫くどころか、当分お世話になることになってしまいました。すいませんっ！」

「え……」

白は、この家に迷惑をかけていることを気にしていたのだ。

「なに言ってるんだよ。謝ることないよ。迷惑だなんて一度も思ったことないし、白と一緒にいるとすごく楽しいんだ。だから……、だからこれからもよろしくね！」

白は僕の言葉にパーっと瞳を見開いて表情を明るくした。

「はい。よろしくお願いします」

まだ居てくれるって言ってくれて本当に嬉しかった。

僕がこんなに自分の気持ちを素直に言えたなんて……きっと白の純粋な心に触れているせいだ。

今度、仲間のもとに帰る時が来たら、その時はちゃんと送り出してあげよう。

もし逆の立場だったら、君は決して引き止めたりしないだろう。

笑顔で僕を送り出してくれるはずだ。

それが友達として、家族としての最大の礼儀だ。そうだよね、白。

第4話　親　父　〈前編〉

白（ハク）が家に来て1週間が過ぎ、今年も残り1日となった12月31日。今日は大晦日。

窓の外では小降りの雪がチラチラ舞い落ち、地面へと消えていく。

街中が新年を迎える準備に追われ大賑わいを見せている頃、僕は家の中で右往左往していた。

大変だ大変だ。

どうしようどうしようどうしよう。

「ちょっと落ち着いたらどうですか？　そんなにドアを開け閉めしていたら、せっかく暖かくなった部屋の空気が逃げてしまいますよ」

落ち着きなく玄関と居間を何度も行き来している僕に、白が諭すように言った。

つい最近、甘党だと判明した白は好物になったプリンを心踊らせながら口に運んでいる。

まったく呑気な奴だ。君が原因で僕はこんなに心悩ませているというのに。

――それにしても遅い！　遅すぎる！

買い物に行ったはずの姉ちゃんがなかなか帰ってこない。

携帯電話を鳴らしてもメールを送っても反応なし。

まだ昼の3時。心配するような時間ではない。ただ、早く伝えたいことがあったのだ。

もう1回、連絡してみようかと携帯を開いた時、姉ちゃんが帰ってきた。

「何してたんだよっ」

「この荷物見たら分かるでしょ、買い物よ。あー重かったー」

姉ちゃんは両手いっぱいに荷物を抱えている。正月用の食材だ。お餅にみかん、おせち料理の材料、その他肉や野菜などがびっちり詰め込まれたスーパーの袋をテーブルに置いた。

「何度も携帯鳴らしたんだけど！」

「あ、ほんと？　全然気付かなかった」

「ったく、なんのための携帯だよっ」

「なにカリカリしてんの？　携帯出なかったくらいで、そんなに責めないでくれる？」

「違うよっ」

僕はそんなことでカリカリしてるんじゃない。

そうだ、早く本題に入らなきゃ！

姉ちゃんは早速買ってきた食材を冷蔵庫に詰め込んでいる。

僕はその背中に話し掛けた。

「親父、帰ってくるって。さっき電話あった」

「そう。一緒に夕飯食べるって？」

「知らないよっ。っていうか、夕飯のことよりももっと重要なことがあるでしょーよ！」

僕は、ソファに座りテレビから流れる情報番組を興味津々に見ている白に視線を送った。

何も言わずとも、それで分かってくれるだろう。

「あ、白のことか。どうしようか……」

やっと僕の悩みを分かち合える仲間ができた。

「お父さんがいる間は、あんたの部屋にでも匿うしかないかな」

「じゃあ、アレは？」

僕は庭にある青いビニールシートで覆われた宇宙船を指した。

「……どうしようか……」

どう考えたって狭い庭を占領している白の宇宙船は隠すことはできない。

一日中カーテンを締め切っておくなど不自然すぎし、不可能だ。

「正直に話すしかないかも…。ちゃんと説明すれば、お父さんだって分かってくれるはずよ」

その言葉に説得力はない。“分かってくれるはず”という願いをこめるだけだ。

あまり家に帰ってこない親父の職業は、医者だ。

しかも担当する患者は決まって緊急を要する。

そう、親父は救命救急医なのだ。

いつどんな状態で運ばれてくるか分からない患者が相手の親父の仕事は、かなりハードなもので、病院で寝泊りすることが日常にな

っていた。
あれはいつだったか、多分2年前だったと記憶する。
テレビに親父が出ているのを観たことがあった。
内容は救命救急の密着もので、テレビのブラウン管に映る親父はすご腕の救命救急医だった。時には若い医師に厳しく指導したりもして、その場を指揮する重要な役を担っていた。
そんな親父の存在は、僕にとっては到底適うことのできない偉大な存在だった。

――親父が融通のきかない、頭の堅い大人だったらどうしよう。

警察に通報されて、白は麻酔銃で撃たれて捕獲され、その存在が世界中に知れ渡ることとなり、連日連夜テレビやラジオ、新聞などで報道されて、有ること無いこと言われて……。
そして連れていかれた白は、人気のない山奥にぽつりと建つ研究所に隔離されるんだ。
窓一つない一室の中に無理矢理に押し込まれて、したくもない実験を強要されるに違いない。
そして白は独りぼっちで一生をそこで送らなければならなくなり、仲間と会うことも二度と叶わない――そんな悪いことばかりが頭を過る。

その日の夕飯は喉を通らなかった。
姉ちゃんも言葉少なく、白もその場の空気を察してか気まずそうにしていた。

「お父さん、遅いね」

姉ちゃんがぽつりと呟いた時、玄関付近で車の停まる音がする。
その音に敏感に反応した僕はオロオロになりながら、玄関に入ってくる親父を待ち構えた。
心臓が早鐘を打って、あまりの緊張に気を失いそうになる。

タクシーから下車し、洗濯物の入った紙袋を持って玄関の戸を引いた白髪混じりの中年男は、正しくこの家の家長である親父だ。

「おお、おかえり」

親父を出迎えた僕の声は裏返り、顔は引きつり、体中にじわりと嫌な汗が滲み出ている。

そんな不自然すぎる僕の言動に、親父は怪訝そうに僕の顔を眺めた。

「……まさかお前が出迎えてくるとはな」

僕だって“まさか”だよと思っている。
僕が親父を出迎えたことなど一度だってない。この日が初めてだった。
そんな僕の行動に意表をつかれた親父は、少し警戒した様子で僕を見つめていたが、靴を脱ぐと、疲れた足取りで家の中へと入ってきた。

「ちょっ、ちょっと！」

僕は両手を横に広げ、親父の前に立ち塞がった。
そうあっさりと通すわけにいかない。でなきゃ、何のために玄関まで出迎えにいったのか分かりゃしない。

「なんだ、さっきから。少しおかしいぞ」

親父の眉間に皺が盛り上がり、苛立ちが浮かび上がる。

「話なら後で聞く。とりあえず風呂に入らせてくれ」

親父は僕の手を払おうとする。でも僕も引き下がる訳にはいかないのだ。

「いや！　今話さないと駄目なんだよ！」

僕は大きく声をはった。内気な性格の僕にしてはとても珍しいことだ。親父もさぞかし驚いたのだろう。仰天して僕をまじまじと眺めてくる。

「今、家に僕の友達が来てるんだ。すごくいい奴なんだよ。それで親父に紹介したいんだけど」

僕はしっかりと親父の眼を見ながら言った。

例えば年頃の娘がこんな台詞を父親に言ったなら、それは間違いなく結婚相手の紹介なのだろう。

しかし、今のこの状況は違う。健全な高校生男子が父親に“友達を紹介したい”とはどういう意味なのか。

きっと親父は理解し難いことだったろう。

「あぁ、構わんが……」

親父は僕の勢いに押し切られた形となり、僕に誘導されて居間へ

と入ってきた――というか入ってこようとしていたが、その足を居間に入る直前でピタリと止めた。

それは予想だにしない出迎えを受けたからである。

そう、居間で親父を出迎えたのは、姉ちゃんと巨漢の猫――じゃなくて白という名の宇宙人。

2人は食卓テーブルとソファの間に横並びに立って親父を迎えていた。

始めは、親父が驚いていないように見えた。

だがそれは反応できない程驚いているのだと分かり、よくよく親父の顔を覗いてみれば、顔面蒼白だった。

持っていた紙袋をバタンと床に落とし、洗濯物が顔を出す。

親父はすぐに白は作り物ではなく異生物だと判断した。

白の柔らかく質のいい毛並みも、黄色く光を反射する瞳も、ふうふうと息をするたびに盛り上がってくる胸の振動も、生物であると認識できてしまう。

医師である親父には容易にそれを判断できたのかもしれない。

「おかえりさい」

姉ちゃんはつとめて笑顔で出迎えた。少しでも親父の緊張を解きたいと思ってのことだ。

「かわいいでしょ？　こうやって抱きつくと、すっごくふわふわで暖かいの！」

姉ちゃんは、やや緊張ぎみに立ち尽くしている白の左腹に、抱き

ついて見せた。

「紹介するよ。僕の友達の白。見た目どおり、おとなしくって優しい奴だよ」

僕も白の隣に立った。白は危険ではないと伝えたかったから。

「お父さん、いつまでそこに立っている気？　早く入った入った」

姉ちゃんは、居間の入り口で驚愕したまま固まっている親父の手を引いてソファに座らせた。

「綾香、水だ。水をくれないか……」

姉ちゃんが差し出したコップの水をゴクゴクと喉を鳴らして一気に飲み干した親父は、少しだけ正気を取り戻していて、ようやく僕たちの話を聞いてくれた。

僕は白がなぜここにいるのか始めから順をおって話した。

そして、僕たちの願いも――。

けれど親父は“このまま白をここにおいてほしい”という僕たちの願いを聞き入れてはくれなかった。

「暫らく考えさせてくれ」

これが親父の答えだった。

第5話　親　父　〈後編〉

深々と牡丹雪が降り積もり、より一層寒さが増す大晦日の夜。
年末恒例のテレビ番組の音だけが部屋を騒がしていた。
僕は居間にいたくなくて白を誘って自室へと逃げ込んだ。
「白、大丈夫。何処へも連れて行ったりしないから」
「はい」
白の上がり気味の目尻が心なしか垂れているように見える。きっと心細いのだろう。この地球上で白が頼れるのは僕と姉ちゃんだけなのだから、なんとしても親父を説得しなければならない。
だけど、親父とまともに会話をしたことのない僕にとって、それは容易なことではないのだ。
暫らく考えさせてくれと言った親父の言葉が、何度も僕の頭に響いてくる。
暫らくっていつまで？
考えるって一体何を考えるっていうんだ？
白は決して危害を加えるような危険な生物ではないし、性格もおとなしく優しい。
そのことはちゃんと伝えた。
親父だって黙って話を聞いてくれてたし、分かってもらえたと思ったのに。

僕は無力だ。
こんな僕に、白を守ることができるのだろうか。
僕は後ろめたいことがあったり、自分が不利な状況に陥りそうになると、自室に逃げ込んでしまう癖がある。
僕は卑怯な奴なのだ。
意気地もない。男らしくもない。どうせ僕なんて……と最後は決まってこの言葉で締めくくられる。
だからこの時も逃げてきたのはいいけれど、これから先をどう切り抜けていいか、分からないでいたのだ。

◇

僕が自室に籠もり、もやもやと自虐思考に陥っていた頃、居間では親父が無言で年越しそばを食べていた。
「ねぇお父さん、私からもお願いします。白をここにおいてあげてよ。白の仲間が迎えにくるまでの間だけなんだから」
姉ちゃんは親父に哀願の眼差しを送っている。
「そういう問題か？　――確かに彼は優しそうだが、それが本性かどうか……、人間を油断させる演技かもしれん。そこをきちんと見極めなければならない」
親父は冷静な口調で言った。

「それはないわ。断言してもいい。お父さんも白と一緒にいれば、すぐに分かるわよ。――あのね、白が来てから翔太は変わったの」
「翔太が？」
「えぇ。翔太は当たり前のことが出来ない子だった。他人を労ったり、挨拶をしたり、友達を作ったりすることが苦手な子だった。だけど、白は翔太の友達になってくれた。翔太は白を守ろうとしてる優しい子になった。
朝は“おはよう”、ご飯の時は“いただきます”“ごちそうさま”って言えるようになったのよ？　凄いでしょ？
私、本当に嬉しかった。
嘘や偽りで人の心は動かせない。
白は私たちを騙したりなんかしてない。
よっぽど人間なんかより、他人を労る心を持っているわ。白はとても優しい人よ！
家のことは私に任せっきりで、たまにしか帰ってこないお父さんには分からないのよ。白が来てくれてから、この家がどんなに明るくなったか……翔太がどんなに優しくなったか……。
それを感じていたら、さっきみたいな台詞は出てこないはずだわ！」

なんとか親父に白の良さを分かってもらおうとしていた姉ちゃんの説得は、次第に熱が入り、仕舞には親父に説教していた。

「お前の性格も変わったんじゃないのか？」

熱弁を奮った姉ちゃんは、はぁはぁと肩で息をしていた。
日頃、親父に意見したりしない姉の行動もまた異例だったのだ。
親父もさぞ面食らっただろう。

まさか下でそんなやり取りが交わされていたなんて、僕には想像もつかなかった。

僕がその話を聞いたのは大分後のこと。こんなこともあったと姉から聞いた。

◇

――ゴーン　ゴーン……

閑静な住宅街に１０８つの除夜の鐘が鳴り響く。
その重厚な鐘の音が、新しい年の始まりを告げた。

「除夜の鐘だ」
「いい音ですね」
「窓開けようか？　もっとよく聞こえるよ」

僕は自室の部屋の窓を開けた。
冷たい空気と共に鐘の音が部屋の中を占領していく。
顔にかかる冷たい風が、僕のもやもやした胸の霧を一掃してくれた気がした。

やっぱりこのまま引き籠もってててはいけない！
もう一度、親父と話をしよう！

僕は強い熱意を胸にし、白を連れて親父のいる居間へと下りた。

しかし親父は風呂に入っていて居間にその姿はなく、僕の熱意も空回り。

「おそば、しようか？　夜ご飯食べなかったし、お腹すいてるんじゃない？」
「うん、食べる」
「白も食べるよね？」
「はい、頂きます」

そばが茹であがるのを待ってると、親父が風呂場からあがってきた。
タイミングを外した僕は口を開くことができず、気まずい空気が親父と僕の間を行ったり来たりする。

そして暫らくの沈黙の後、最初に口を開いたのは白だった。

「明けましておめでとうございます」

白が発した新年の挨拶に意表をつかれた親父は、返す言葉を失っている。

「あれ？　もしかして私、挨拶間違えちゃいましたか？」

白が不安げに僕に耳打ちしてきた。

「ううん、間違ってないよ」

そして僕も親父に新年の挨拶をした。

「親父、明けましておめでとう」

その時すごく照れ臭かったことを覚えている。
そして親父も照れ臭そうに、明けましておめでとうと言ったこと

も。

「親父、また後で話きいてほしいんだけど」
「あぁ、分かった。早く食べないと、そば延びるぞ」
「うん」

まさか、この新年の挨拶を皮きりに親父の心境が変わっていったなんて、この僕が知るわけがない。

「いただきまーす」
「白、熱いからフーフーして食べるのよ」
「はい。いただきます」

今はもう当たり前になった白との食卓風景。
だが親父にとっては、初めて見る光景だ。
親父はソファに座り、肩に掛けたタオルで濡れた白髪混じりの頭髪を拭きながら、その光景を眺めていた。

ただ眺めていた。

引っ込み思案な自分の息子と、猫の姿をした宇宙人の和やかな食卓の風景を――――。

◇

昨夜はなかなか寝付けなかったせいか、僕が起きた時はすでに朝の１０時を回っていた。

窓からは眩しい太陽の日差しが差し込み、僕の顔を容赦なく照らす。

昨日降り積もった雪は、その暖かさですっかり溶けていた。

いつも僕の隣りで寝ている白の布団は、すでに畳まれてある。

どうやら寝坊したのは僕だけのようだと、ひどい寝癖をつけて居間へと下りた。

居間の隣りには障子一枚を挟んで１０畳の和室がある。普段は使用しないため、その障子が開いていることはほとんどない。

だが今日はその障子が開かれていて、そこにはこたつが敷かれてあった。

しかも、すでに先客がこたつを占拠している。

先客とは勿論、白のことだ。やっぱり躰は大きくても見た目は猫だ。こたつがよく似合う。

「どうしたの？　こたつなんて……」

こたつなんて、ここ何年も出していなかったのに。

「ふふふ、お父さんがね、朝一番で出してくれたのよ。多分、白のためにね……」

台所に立っていた姉ちゃんが含み笑いをしながら嬉しそうに言った。

「えっ、親父が？」

僕は予想外の展開に眼をまるくし、あの名曲が頭を過る。

“ねーこは　こたつで　まるくなるー”

姉ちゃんの“ツナ缶”も笑えたけど、親父の“こたつ”も正直笑えた。なんて安易な発想なんだろう。

けれど、それよりも何よりも嬉しかったのは、親父が白を信じてくれたこと。白を受け入れてくれたこと。　それが堪らなく嬉しかった。

僕は嬉しいやら可笑しいやらで、涙が出る程腹を抱えて笑った。

その場にいた姉ちゃんも白も、僕が馬鹿笑いする様子を不思議そうに見ていたけど僕の笑いは止まらない。

親父の粋な計らいで僕の新年は明るいスタートをきった。

こうして白のことは僕と姉ちゃんと親父だけの秘密になった。

そして、僕と親父の距離もほんの少しだけ縮まったような気がする。

第6話　秘　密　〈前編〉

まだ朝日も昇らない早朝４時。
真っ暗闇の家の中に、少しだけの灯りとシャーという水の出る音が人目を避けるように漏れている。

そこは1階の隅にある洗面所。
コホッコホッと嘔吐する声が聞こえる。

その声の主は姉ちゃんだった。

そして、そんな姉ちゃんの姿をドアの細い隙間から覗き見ていたのは――あの黄色の大きな瞳だった。

◇

短いようで長かった冬休みも終わり、新学期が始まって1ヵ月が過ぎた2月半ば。
受験生である3年生は登校してない生徒も多く、若干校内が静かに感じる。

僕が帰宅すると、白が神妙な面持ちで僕を出迎えた。

「どうしたの？　白」

「翔太に話しておきたいことがあるんです」
白の深刻そうな表情に軽い胸騒ぎがした。
こたつに入った白は猫背になりながら、顔をくっと近付ける。
そして今朝姉ちゃんが洗面所で嘔吐していたことを話してきた。
「姉ちゃんが、吐いてた？　なんか悪い物でも食べたんじゃない？」
「違うと思います」
「なんで？　なんか心当りでもあるの？」
「昨日も同じ時間頃に吐いているのを見ました」
「2日続けて吐いてたってこと？」
「はい」
僕は両腕を胸の前に組んで暫し考える。
姉ちゃんが病気することなど珍しい。
たまに風邪をひいたり、熱がでたりすることはあるけど薬も飲まずに治してしまうタフな姉だ。
それに、病気のしない人間なんていないのだから、タフな姉でも体調を崩すことがあっても別段おかしなことでもないだろう。
ただ、白の話を聞いて気になることもあった。
それは、僕たちの前では平然を装っているということ。
別に隠す必要はないはずだ。ツライならそう言えばいいのに。
もしかして悪い病気にかかってるとか……？！

だから気付かれまいと平静を装っているのだろうか……。

僕がウーンと唸りながら一人で思案していると、白は大きな顔をさらに近付けてきた。

「何を考えているのですか？」

恐いよ、白。

顔、近付け過ぎ。

「いや……、別に。――まぁ、もう暫らく様子をみよう。姉ちゃんから何か言ってくるかもしれないしさ」

僕はそう言ったけれど、白は納得がいかないのか黙ったままだ。

白も白なりに何か考えてる感じだった。

もしかしたら、僕と同じ考えを起こしていたのかもしれない。

その日の夕方、姉ちゃんはいつもと変わらない様子で帰ってきた。

「ただいま」

と言って台所に立っている普段どおりの姉ちゃんの姿に、僕は少し安堵した。

具合の悪そうな素振りは微塵も見せない。

もしかしたら、考え過ぎなのでは？　と胸の不安を取り払った。

翌日、姉ちゃんは仕事を休んだ。
白に訊けば、今朝も吐いていたらしい。
そんな姉ちゃんは見たことがない。
また悪い予感が僕の頭を過る。
僕は、白に姉ちゃんのことを頼んで学校へ行った。

1限目の数学の授業中、僕はノートをとるのもそっち除けで悩んでいた。
左手で頬杖をつき、右手に持ったペンをクルクルと指先で回しながら、姉ちゃんの病気のことを考えていた。

やっぱり親父に知らせた方がいいんじゃないだろうか。
親父は医者だし、僕なんかより親父からそれとなく聞き出してくれた方がよくはないだろうか。

僕は考えた末、昼休みに親父の携帯に連絡することにした。
もし悪い病気なら早く検査した方がいい。親父なら的確な判断ができる。

しかしこんな時でも親父は掴まらない。
昼休みにかけた親父の携帯は留守番電話だった。

僕は姉ちゃんの具合が悪いことだけを留守電メッセージに残して電話を切った。

６限目の終わるチャイムがなりＨＲが終わると足早に家へと向かった。走って帰れば１０分弱で家に着く。

その僅かな間中も嫌な予感は胸に張りついたまま離れなかった。

◇

ほぼ同じ頃、白は姉ちゃんの部屋の前を何度もウロウロしていた。そして、そっと姉ちゃんの部屋のドアノブを回し、ドアを開けた。

白が少し遠慮ぎみに部屋を覗きこむと姉ちゃんはベットの上で座っていて、ちょうどドアの方に身体を向けていた姉ちゃんと目が合ってしまう。

白は覗きがバレたと顔を強ばらせ、気まずそうにドアを閉めようとした――けれど、姉ちゃんのその声に白の手は止まった。

「心配してきてくれたの？」

姉ちゃんは怒ってないようで、ほっと胸を撫で下ろす白。

「入ってもよろしいですか？」

「どうぞ」

姉ちゃんは快く白を部屋へと招き入れた。

白はその大きな身体を少し縮めて部屋へと入る。

白は居間に入る時も、僕の部屋に入る時も、決まって同じ仕草をするのを見ると、どうやら白にとって部屋の出入口は少し幅が狭いようだ。

姉ちゃんの部屋はいつだって整理整頓されている。

綺麗に片付いた机、びっしり書物が埋まっている本棚、ピンク色のチェックのカーテンにベット。部屋中には仄かにフローラルの香りが漂っていた。

どれも僕の部屋とは違うと白は感じただろう。

「気分はいかがですか？」

「大丈夫よ。心配してくれてありがてう」

「少し話をしてもいいですか？」

「えぇ、いいわよ」

白は姉ちゃんのベットに歩み寄るとその脇に腰かけた。

上半身をお姉ちゃんの方へ少し捻り、そっと訊ねる。

「姉ちゃんのお腹の中には小さな生命が宿っていますね？」

姉ちゃんは白の言葉に“なぜ知っているの？！”といった表情で目を見開き、その両手を下腹部にあてた。

それが答えだ。

図星だった。

姉ちゃんは妊娠していたのだ。

「知って……いたの？」

「はい。何となく」

「そう……。じゃあ、翔太も？」

「いいえ。多分知ってるのは私だけです。――でもなぜ隠す必要があるんです？　新しい生命が誕生するなんて、とても喜ばしいことじゃないですか！　私はとても嬉しいです！」

白が大きい瞳を細めて微笑む。

一方、その白の笑顔を目にした姉ちゃんはポロポロと大粒の涙を流した。

「あのね、白……。この子は……、この子はね、望まれて出来た子じゃないのっ」

姉ちゃんは足に掛けた上布団のシーツをぎゅっと握り締め、泣き崩れた。

「私……、どうしたらいいかわからないのよっ」

両目から溢れ出るその大粒の涙は、暫く止むことはなく、白は無言で姉ちゃんの肩を抱いた。

その頃僕はといえば、姉ちゃんの部屋の前で白と姉ちゃんの会話を盗み聞きしていた次第で……。

この期に及んで言い訳をするわけではないが、盗み聞きをしたくてしてたわけではない。

急いで帰ってくると2階の廊下をうろうろしている白の背中が少しだけ見えて、ちょうど姉ちゃんの部屋に入るところだった。

それから話し声が聞こえてきて、部屋の前まで来た僕は、少し開いたドアの隙間から二人の様子を見聞きしていた――と、そういうわけだ。

正確には見聞きしていたというよりは、中に入るタイミングを見計っていたのだが、話の内容が以外な展開をみせ、結局最後まで廊下で聞くはめになってしまったのだ。

なぜ姉ちゃんか泣いているのか、いくら奥手で鈍い性格の僕でも、それなりに想像がつく。

少なくとも“相手”はこの妊娠を喜んでいないのだろう。

僕は廊下の壁に凭れ、声を掛けられずに息を潜めていると、玄関から物音が聞こえた。

階段の下はすぐ玄関で、覗けば誰がいるかすぐに分かるような構造だ。

僕はそっと覗き込むと、玄関にいたのは親父だった。

僕の留守電メッセージを聴いて帰ってきたのだ。

親父は靴を脱ぐと、その足で階段を上がってきた。

この時僕は思った。

もしかして僕は余計なことをしたのではないだろうかと。

今、親父と姉ちゃんを会わせてしまうことは、あまりにもタイミングが悪すぎる。

僕は後ろめたくなって、自分の部屋に身を隠した。

親父の足音が僕の部屋を通り過ぎ、隣りの姉ちゃんの部屋の前で止まる。

僕は右耳をピタリと壁につけ、聞き耳をたてた。

姉ちゃんは、親父の突然の登場にひどく驚いている様子だ。

必死で涙を両手で拭っているのだろうが、その真っ赤に腫れた両目は誤魔化しきれてないのだろう。

親父の第一声に心配の色が交ざっている。

「綾香、お前一体どこが悪いんだ？　ちゃんと病院で検査してもらったのか？」

姉ちゃんは返事をしない。

「ちゃんと話してくれないと分からんだろ？」

いつになく親父の声は優しかった。

姉ちゃんと親父の間に挟まれて気まずそうにしている白の姿が目に浮かぶ。

「私……妊娠してるの……」

「……なに？」

「だから……、子供ができたの！」

姉ちゃんの衝撃の告白に親父は動揺を隠せないようだった。
だがさすがは親父だ。頭ごなしに怒鳴り付けたりはしない。

「……そうか。そうだったのか……。それで相手の人にはもう話したのか？」

姉ちゃんは頷いたのだろう。
また『そうか……』という親父の低い声が聞こえた。

「綾香、どうして下を向いている？　何か隠してることがあるんじゃないのか？」

親父の問いに暫くの沈黙。
会話しか聞こえない僕にまで伝わる緊迫感。
身体をビクつかせた姉ちゃんの仕草まで目にみえるようだ。

「今度、相手を連れてきなさい。３人でゆっくり話をしよう」

親父はこう言い残し、部屋を後にした。

きっと訊きたいことは山ほどあったはずだ。
だけど親父は、問い詰めなかった。
親父は姉ちゃんから話をしてくれるまで見守ると決めたのだろう。
だけど姉ちゃんが隠している秘密は、親父を裏切るものだった。

第7話　秘　密　〈後編〉

この日は、青い晴れ間が広がる、とても暖かい土曜の昼下がりだった。

まだ寒さの残る2月とは思えないほどの陽気さだったのだが、家の中は異様な緊張感を漂わせている。

居間にあるソファには姉ちゃんと親父が向かい合うように座り、僕と白は食卓の椅子に並び座って二人の様子を見守っていた。

先日親父は“3人で”と言ったのに、この場に相手の男は現れない。

親父はそのことに少しイラついてるようだった。

「なぜ彼は来ないんだ？　私はちゃんと時間を作ったというのに、失礼じゃないか」

姉ちゃんは少し黙った後、おずおずと口を開いた。

「彼は……来ません。――呼ばなかったの」

「それはどういう意味だ？　親に紹介できない相手とでも付き合ってたということか？」

親父は込み上げてくる怒りを必死で押さえているようだった。

「彼は何と言ってるんだね？　ちゃんと責任をとると言ってくれたんだろう？」

黙りこくった姉ちゃんに親父は問い掛ける。
けれど姉ちゃんはだんまりを決め込んで口をつぐんだままだ。
「綾香！　何とか言いなさい！」
親父の我慢もここまでだった。
バン！　とテーブルを叩いて姉ちゃんを見据る。
父親の貫禄を目にした僕と白までもがその怒声に肩をびくつかせた。
姉ちゃんは観念したかのように口を開いた。
この場合は開き直っているといった方が正しいかもしれない。
「そうよ。お父さんの言うとおり。彼のことは紹介できない」
「なぜ紹介できないんだ！？」
「家庭のある人だからよ。私、奥さんがいる人と付き合ってたの！」
二人の会話は半分怒鳴り合いのようになっていた。
「〜っ、なんだと！？　よくも恥ずかしくもなく、そんなことが……！」
「お父さんが訊くから正直に答えただけしょ！？」
その時、バチンと親父の張り手が姉ちゃんの左頬に飛んだ。
白は、まるで自分が叩かれたかのように左頬に手をやり、すりすりと擦りだす。

その気持ち、分からないでもない。
あの乾いた音は痛々しいものがあった。
「私だってもう21（歳）よ！　もう子供じゃないんだから、ほっといて！」
姉ちゃんは捨て台詞のように言い放つと、すごい勢いで2階へと駆け上がっていった。
僕は無意識に追いかけようとしたが、親父に追うなと言われて何もできずに立ち尽くすだけ。
その後は親父も白も口を開かずにいた。
皆、一体何考えているんだろう。

僕はその重たい空気に絶え切れず、家を出た。
白も誘いたかったけど、それはできない。
僕は宛てもなく住宅街を歩く。考えることはやっぱり姉ちゃんのことだった。
姉ちゃんは僕と違って昔から優等生だった。
学生の頃は生徒会長も務めたこともあって、きっと親父にとっては自慢の娘だったに違いない。
その自慢の娘が他人に後ろ指をされるような交際をし、子供を身籠った。かなりの衝撃だったろう。

僕はクリスマス・イヴのことを思い出していた。

僕が皮肉混じりに言った、イヴを過ごす相手もいないのかという問いに姉ちゃんは口籠もったっけ。

相手が家庭のある男ならばクリスマス・イヴは一緒にいられない。所詮姉ちゃんは2番目の女。愛人なのだ。

それは僕にとっても全く想像のつかない受け入れがたい事実だった。

暫く時間を潰して帰った家の中の様子は僕が出ていった時とあまりかわらなかった。

木漏れ日が差し込む庭の端で、2羽の雀が寄っては離れ、突き合っては1羽が逃げると、もう1羽が追い掛ける。まるで恋人同士が戯れているかのよう。

そんな楽しげな2羽の雀とは裏腹に家の中は沈黙を守り続けていた。

親父は居間のガラス戸を開けるとそのまま床に座り胡坐をかいた。目の前には青いビニールシートが広がっている。

「どうぞ」

白が親父に入れたてのお茶を渡した。
それは白ができる精一杯の気持ちだったのだろう。

「ありがとう」

親父は白に礼を述べると、また庭の方に顔を向け、ゆっくりと語りだした。

「昔はここでね、空気で膨らませたプールを広げて水遊びさせたもんだよ。
綾香は大きくなったら、お父さんのお嫁さんになるんだって言ってくれてね。
頬擦りしたくなるほど嬉しかったけれど、大きくなったらそんな言ったことさえ忘れて、好きな人を連れてくるだろうと覚悟していたさ。

愛する人と結婚をして、幸せな家庭を作る。そんな当たり前の幸せを掴んで欲しいと願うのは、普通の親なら当然だろう？」

「すいません。大切なお庭を、こんな風にしてしまって……」

白は宇宙船で大きな穴を空けてしまったことを詫びた。

「いや、構わんよ」

親父は白が入れたお茶を一口飲んだ。

僕は二人の間に入れず、居間の入り口からそっと二人の背中を見ていた。

親父と対等に肩を並べている白の大きな背中を見ていると、その猫背がすごく頼もしく見えて、一体君は何者だろうと思わずにはいられない。

そんな僕の思いをよそに、白の声が静かに響く。

「姉ちゃん、産みたいんだと思うんです。ただ勇気が出ないだけで……。多分、誰かに……いいえ、お父さんに背中を押してもらいたいんじゃないでしょうか」

「なぜ君にそんなことが分かるんだい？」

「姉ちゃんの様子をずっと見てれば分かります」

「ははっ、これは参ったな。家にいない私は親失格ということか……。

――私にはさっぱり分からんよ……」

親父は苦笑する。

「ねぇ白君、もしこの場に母親がいたなら、あの子に何て言ってやるんだろうね……。

やっぱり男親は駄目だね」

そして親父は天を仰いだ。

親父の背中はどこか寂しげだった。

◇

その夜、姉ちゃんは自室にある椅子に座り、勉強机に一枚の紙切れを広げていた。

「姉ちゃん、大丈夫ですか？」

「白……」

姉ちゃんは咄嗟に紙切れを引き出しに隠した。

白は字の読み書きができないから隠さなくてもいいのに、見られたくないという心理から勝手に手が動いたのだ。

「何を考えているのですか？」

「……別に」

「――いけませんよ」

「え……何のこと？」

「本当は産みたいのに諦めようとしている。違いますか？」

「！　――なんで……」

誰にも言えず独りで悩んでいた姉ちゃんの胸の内を白は知ってい

た。
それはなぜなのか――。
姉ちゃんは驚愕の瞳で白を見つめた。
「――実は私、ひとの心を見ることができるんです。失礼とは思ったんですが、覗かせて頂きました」
微笑しながら穏やかな口調で白は隠していた能力を告白した。
「白、何言ってるの？」
「信じて貰えないなら、もう少し話をしましょうか？」
そして白は続けて語り出す。
「彼は同じ会社で働く営業マン。年令３０歳。半年前、既婚者であると知りながら好きになってしまった」
白の口から語られた姉ちゃんの秘密は、全てが真実。
「それから誰にも言えない交際が始まり、彼に妊娠したことを告げたら“今ある家庭は壊したくない。諦めてほしい”と言われたけど姉ちゃんは……」
「やめて！　分かったからもうやめて！」
淡々と白が語る中、耐えきれなくなった姉ちゃんの声が制止する。
姉ちゃんは、もう聞きたくないと両手で耳を塞いだ。
「私だって本当はこんなことしたくなかったんです」

「……じゃあ、どうしてこんなことするの……」

姉ちゃんは責めるような目で白に訊く。

そっとしてほしいのに、どうして余計なことをするのかと、白を鬱陶しく思ったに違いない。

けれど、白の声は予想以上に温かくて――。

「姉ちゃんには幸せになってほしいからです」

真っすぐで透き通った声色で語られたな白の優しさに、姉ちゃんの胸がトクンとなった。

「後悔してほしくないんです」

「白……」

そして姉ちゃんはまた泣いた。

その涙は、もう泣くまいと母親になることを決意した涙だった。

涙が乾くまで十分に泣いた姉ちゃんは、涙を拭くと、引き出しに仕舞った紙切れを破り捨てた。

ごみ箱に捨てられた紙切れの端に“中絶”の文字が辛うじて見える。

今の姉ちゃんには、この紙切れはもう必要ない。
目の前にいる白によって救われたのだから。
「――心を見る力か……羨ましい力ね」
「私の星では皆持っている力です。
前に名前のない話をしましたよね？
人間は初対面の時、自己紹介をします。まず名前を名乗り、自分が何者かを明かす。
けれど私たちはまず相手の心を見てしまう。
相手が何者か、なぜ此処にいるのか、相性は合うのかと全てを知ることができるのです。だから名前を名乗る必要もないし、名前などいらないのです」
「なぜそんな力があることを隠していたの？」
「隠していたのではありません。絶対に使わないと決めていたんです」
「どうして？」
「翔太や姉ちゃんには、この能力を持っていない。
私だけが一方的に覗いてしまうのはマナー違反だと思ったからです。
だから今回限りです。今後一切使いません。信じてください」
姉ちゃんはコクンと頷いた。
「それからお願いなのですが、翔太には秘密にしておいてください」
「分かったわ。二人だけの秘密にしましょ」
姉ちゃんは片目を閉じ、ウィンクして見せた。
白はウィンクが分からない様子だったが、真似してウィンクして見せる。

「――私の話はこれぐらいにして、下に行きましょうか。姉ちゃんの話しを待っている人がいるでしょう？」

「うん」

この時の二人の会話も、僕が知ることになるのはずっと後のことになる。

ずっと、ずっと後に――。

◇

それから姉ちゃんは親父に自分の想いを告げた。

「片親しかいない辛さや寂しさはお前が一番分かっているはずだ。その子にも同じ想いをさせることになるんだぞ。それでも産むのか？」

「産みます。確かに辛い想いもした。寂しくて泣いた時もあった。だけど不幸じゃなかったわ。絶対後悔しない！」

「――そうか……分かった」

親父は姉ちゃんの熱い決意に押し切られ、その後暫らくは口を開かなかった。

その夜、親父が写真の中の母親に何か話掛けているのを見た。
何を話してたかは分からなかったけど、寂しげな微笑を浮かべていた。

第8話　初乗船

季節は春――。
強引に身体を押すような突風が吹き抜けるこの季節。
河川敷に沿って立ち並び、桃色の花を咲かせる木々たちは、桜というのだと白に教えてあげた。

ハラハラと散る様は何処か寂しげで儚く、そして美しい。
風に巻かれ落とされた花びらは灰色のアスファルトを次第に桃色へと染めていく。
いつの日か桃色に染まった河川敷を歩いてみたいものだ、と呟いた白の瞳もまた寂しげだった。

この頃から白の様子は少しずつ変化していった。
姉ちゃんに文字を習い始めたのだ。
その理由は分からない。
白は何にでも興味を持つみたいだから、またいつもの好奇心が疼いたのだろうくらいしか僕は思っていなかった。

それから変わったと言えばもう一つ。

最近、頻繁に宇宙船に籠もるようにもなった。

中で何をしているのか、これもまた不明だ。
中から漏れてくるのは機械的な電子音と宇宙語だけ。全く解読不能。

「おや？　どうかしたんですか？」

僕が宇宙船の外壁にピタリと耳をつけ聞き耳を立てていると頭上から白の声がした。
ちょうどタイミングよく宇宙船の蓋が開き、ひょいと顔だけだした白は不思議そうに僕を見下ろしている。

「いや……何してんのかなーって……」

僕は背伸びしながらそれとなく話題をふってみる。

「何って、交信してるんですよ。離れていても情報の交換はできますからね」

「ふーん。――それにしても白たちは凄いね。何万光年と離れた地球まで来れる技術を持ってるんだからさ」

僕は盗み聞きしていたことを誤魔化したくて話を逸らした。
勿論、凄いと思ったのも正直な気持ちだ。
けれど白はそうは思っていないようで……、

「“それだけ”ですけどね」

と嘲笑うかのように微笑した白はいつもと違っていた。
どこか自分を卑しめてるかのように見える。
普通の猫ならばあんな複雑な表情はできない。
白はとても表情豊かな猫型宇宙人なのだ。

――でもね、どんなに表情豊かであっても寂しそうな白なんか見たくないよ。

一体、白は何を考えているんだろう。
一体、白は何をしたいんだろう。
僕にはさっぱり分からないや。
「ねぇ、僕も中に入れてよ」
クリスマス・イヴ以来、ずっと狭い庭を占領している一隻の宇宙船。円くて黒い未確認鉱物の塊。
この地球上にあってはならない異物だ。
家の右隣りは空き家で左隣りは老夫婦の二人暮し。
この環境が功を奏して、この3ヵ月間今だ誰の目にも触れられずにいる。
一体船内はどうなっているんだろうと好奇心は前々から抱いていたけれど、見せてほしいとは言わなかった。
言ったところで答えはNOに決まっていると思っていたから。
だけど返ってきた答えはあまりに簡単で――
「いいですよ、どうぞ」
と拍子抜けしてしまうくらい軽い言葉だった。
断られると承知の上だっただけに、こうもあっさり受け入れてくれるとは……思いの外、気が抜ける。
白、僕が言ったこと分かっている？
白から見たら僕は異星人なんだよ？

そんな簡単に異星人に船内を公表してもいいの？

なんだか僕の方が気がひけてきた。

「本当に？　本当にいいの？　本当に僕なんかが入っても大丈夫？　後で白怒られたりしない？　無理ならいいんだよ？　やっぱ……やめとこうか？」

僕は念のためもう一度訊いてみた。

「本当に僕が乗ってもいいの？」

今度は慎重にゆっくりと。

「ん？　翔太はどうしたいのですか？　乗りたいのですか？　乗りたくないのですか？」

僕が何度もしつこく訊くもんだから白は少し呆れて、逆に訊いてきた。

「乗りたい！」

勿論、僕は即答。

「では中へどうぞ」

僕は宇宙船の外壁に付いている取っ手を掴み頂上まで登った。

頂上と言っても高さ2メートルくらいなのでそんなに高くない。

白が横に立つと同じくらいの高さだ。

宇宙船の屋根部分にあたる円型の蓋が出入り口で白の胴回りを考えてもこの出入り口は狭いと思うのだけど……ま、細かいことはどうでもいいや。

中を覗き込んだら薄暗くて白い床が見えるだけだった。すぐ真下に足場のような台が付いていたのでそこに足を掛ける。

あとは床まで1メートルもなかったので右足を蹴ってポンと着地した。

もしかして僕は人類史上初の快挙を成し遂げてしまったのではないかと興奮しつつ船内を見渡す。

円い船内は予想以上に狭く、半径1メートルの円の中にあるのは操縦席と大きなコンピューター機材。上下に移動するレバーや赤や緑に点灯する四角いスイッチやボタンが操縦席の前を埋め尽くしている。

これらの機械は狭い空間の3分の1を占めていた。

そして、窓一つない船内を唯一明るくしているのは操縦席正面のモニター。今は何も映し出されていないそのモニターは白い蛍光色を放っているだけだ。

緑色の交じった黒いブロック壁は不思議な感触だった。

人差し指で押すとスポンジのような弾力があり、とても柔らかい。

けれど僕が触れたブロック部分だけは見る見るうちにその性質を変えていく。

柔らかかった壁は次第にカシカシと音を立てて硬化していき、仕舞には鉄板のように硬くなる。そして時間が経つとまたスポンジ状

に戻るのだ。
宇宙には未知の鉱物や物質がまだまだ存在するのだと思い知らされた気がした。
その不思議な壁に囲まれた船内で自由の利くスペースはとても狭い。布団一枚敷けるのがやっとの広さだ。
身体の大きい白にとっては窮屈な場所だろう。
「この宇宙船は仕事用ですから」
僕の気持ちを察したのか、白は唯一ある操縦席の背もたれに身体を預けながら言った。
「どうして僕を入れてくれたの？」
僕は不思議な感触のする壁を手で確かめながら白に訊いた。
嬉しいけれど、本当にいいのかなと思ってしまう。
「中の様子を頻りに気にしていたでしょう？　こそこそと聞き耳を立てられるより、あっさり中に招いてしまった方がこちらも気分を悪くしなくて済みますから」
あ……盗み聞きしてたことバレてたんだ……。
さらりと言った白の言葉に嫌味は感じないけれど、遠回しに僕の行動を非難しているように聞こえるのは僕の気のせいだろうか。
いくら言葉が分からなくても盗み聞きはよくない。
だけどさ――

何も話してくれない白も悪くない？

そう言いたかったが、ピピー、ピピーという電子音に邪魔されて僕と白の会話は途切れた。

白はその音に敏感に反応し操縦席の背もたれから身体を起こし、少し前傾姿勢をとった。

手慣れた手つきで手前の赤いボタンや左端のレバーに手を伸ばすと前方のモニターを見つめる。

すると今まで真っ白な蛍光色を放っていただけのモニターに何かが映った。

そこに映し出されたのはもう一人の白。――否、よく見ると瞳の色も耳の形も身体の模様も違う。

僕はこの時、白以外の猫型宇宙人をモニター越しに見たのだ。

僕から相手が見えるように相手もこちら側が見えているらしく、白の隣りに立つ僕の姿を目にした相手は身体を仰け反りながらも白に対し頬りに抗議している。

何を言っているか分からない僕でもかなり慌てている様子は見ていて明らかだ。

一方、僕の隣りにいる白は冷静に対処していた。

「僕がここにいたこと、まずかったかな？　白、叱られたんじゃない？」

「心配しなくても大丈夫ですよ、叱られてはいませんから。
しかし彼でもあんなに取り乱すことがあるんですね。ちょっと見ていて面白かったです」

と言って少し悪戯な笑みを見せる白。こんな白を見たのは初めてだった。
星の仲間に見せる顔と僕の前で見せる白の顔って違うんだなーって漠然と思った。

そう、僕は白のことを何も知らないんだ。

きっと僕の知らない白の顔はまだまだあるのだろう。

なんとか落ち着きを取り戻した彼が左右に3本ずつ生えている細長い髭を整えながら宇宙語で白に話し掛けている。
白も真剣な顔つきで聞いたり言ったりしている。
なんか僕だけ仲間はずれにされてる気分だ。
とりあえず二人の会話が途切れるのを待っていると、ふいに白の顔が横にいる僕の方に向いた。

「翔太、彼があなたと話をしたいそうです。どうしますか？」
「えっ、僕と！？　でも言葉が分かんないよ？　あの人、日本語話せるの？」

「話せませんけど問題ありません。言語プログラムシステムを取り入れれば彼の言葉を機械が人間の言葉に訳してくれますから。
とりあえずそのプログラムを送ってもらいましょう」

白はそう言うと柔毛で覆われた丸い手先を機敏に動かしながら操縦席の前に並んだコンピューターのキーを打ち始めた。
すると白が打ち出した宇宙文字や数式の羅列が次々とモニターに映し出される。まるで映画のエンドロールのように下から上と流れていった。
その画面後ろでは彼も白と同様のことをしているのが映りこんでいる。

「こちら完了しました」

白の報告を受けた彼がこくんと頷くと彼の視線は僕に向いた。
何を訊かれるのかと僕は身構えてしまい自然と顔も強ばる。

「あなたが翔太さんですね？　あなたには大変よくして頂いているとオウジから聞いております。私からも一言お礼を申させて下さい。オウジを助けて頂き誠にありがとうございました」

銀色の瞳に少し丸みのある三角の耳、そして濃い灰色の体毛が身体全体を覆っている。
声質から５０代くらいの中年男性といったところだろうか。
白にも負け劣らない丁寧な口調で謝礼を述べた。

そんな礼を言われるような大層なことをしたつもりもないし、むしろ白が来てくれたおかげでつまらない日常からぬけだせたのだから感謝するのは僕の方だ。

けれど今はそんなことは後回しでいい。

彼が言った言葉の方が気になって仕方がなかった。

オウジ？

白に特定の名前はないと言っていた。相手によって呼び名が変わるとも――。

これもその一種か？　それとも白は――

第9話　星の王子様

「嘘、ついてたんだね」

白は星の王子様であるらしい。モニター越しに映っている彼の口調からして、どうやら間違いないだろう。
白は高貴な身分の御方だったんだ。

よくよく考えてみると思い当たる節がなくもない。

礼儀正しい悠長な話し方、紳士的な態度、上質でどこか品の良いオーラをずっと僕は傍で感じてた。

「嘘を言ったつもりはありません」

立っている僕と操縦席に座る白の視線はちょうど同じ高さで白の真っすぐな瞳には僕が映っている。
モニター越しの彼は不穏な空気を察し、心配そうにこちらを伺っていたけれど僕は構わず白を問いただした。

「確か地球生態を調べに来た調査員だって言ったよね？　明らかに嘘じゃん」

「嘘ではありませんよ。
確かに私は王の息子です。けれど調査員であることも事実です」

「じゃあ隠してたんだ」

「隠したつもりもありません。ただ話すタイミングを逃してしまっただけです」

「そういうのを隠してたって言うんだよ！」

「なぜそんなにムキになってるんです？　私が王子だと知っていたら私への態度も違っていたと？」

「そんなわけないだろ！」

「では何を怒ってるんです？」

強く否定はしたものの内心ではドキリとしていた。

確かに始めから王子だと知っていたら僕は違った態度で接していたかもしれない。

そんな色眼鏡で見られる辛さは僕が一番知っているはずなのに――。

問い詰めていたはずが逆に追い詰められてしまい返す言葉が見つからない。

なぜこんなにもムキになって怒ってるのか自分でもよく分からない。

ただ、なんだか裏切られた気がしたんだ。

実のところ、白のことはよく知らない。ただ勝手に知ってる気になってただけで。

「あのー……」

そこへモニター越しに様子を伺っていた彼が口を挟んできた。
「あの私、何か余計なことを申してしまったようで……」
申し訳なさそうなに俯きぎみの彼。
「大丈夫ですから気になさらないで下さい。
こんなことで私と翔太との仲は壊れませんから。
そうですよね？　翔太」
彼を気遣い、僕には信頼の意を述べて笑顔まで見せた白は一瞬にしてその気まずい空気を一掃した。まさに王族の風格と貫禄だ。
そんな白に圧倒された僕は首を縦に振ることしかできなかった。
そしてモニターに映る彼もまた安堵したようだった。
彼は全調査員の指揮をとる総司令官で職場上では白の上司にあたる人だ。
けれど王の息子に厳しく指導したりできるわけもなく終始敬語だ。
どうやら彼は自分より身分の高い部下を持つというとても難しい立場にいるようだ。
なんとかこの場を納め、初めての交信を終了しようとした頃、彼が思い出したかのように言った。
「――あ、王子言い忘れるところでした。王の様態ですが……なん

とか持ち直しましたのでご心配なくと側近の者が申しておりました」
「そうですか……安心しました。父のこと、くれぐれも頼みますとお伝え下さい」

彼と白の顔つきはかなり深刻そうで、特に白は交信を絶った後もしばらくは心配の色を滲ませていた。
会話の内容で白の父である王が病気であることは想像がついた。

「具合悪いの？」

「えぇ。でも大丈夫ですよ。大した病気ではありませんから」

白は無理に笑顔を作り平然を装っていた。
あまりいい笑顔ではなかった。

なのに僕は気付いてあげれなかったんだ。

明らかに注意信号が点滅していたのに……立ち止まってやれなかった。

なぜこの時もっと話を聞いてあげなかったんだろう。
なぜもっと気に止めてあげなかったんだろう。

なぜもっと――

僕がこんな風に後悔の念で押し潰されそうなるのはそれから何日も後のことだった。

春の陽だまりが淡い花の色香と共に居間にいる僕たちを優しく包み、陽気な小鳥たちの囀りが胸の隅を擽る昼下がり――

何を思ったのか、姉ちゃんが押し入れに仕舞てあった電子ピアノを引っ張り出してきていた。

その電子ピアノには幼い僕の夢も希望も溢れんばかりに詰まっている。

この時の僕にとっては眩しすぎて直視できない代物だ。

姉ちゃんは少し膨らんだお腹を擦り、橙色の絨毯が敷かれた床に座りこむ。

そしてガラステーブルに置いた電子ピアノにそっと手を添えた。

仕事を辞めて時間を持て余していた姉ちゃんは、お腹にいる赤ちゃんに弾き聴かせようと、学生時代に練習したクラシックの名曲を披露した。

細い指先が踊るように白黒の鍵盤を叩き、優しい音色を響かせる。

まだ見ぬ我が子にそっと語りかけるように――。

姉ちゃんの傍らにいた白はそっと瞳を閉じてその音色に聴き惚れていた。

曲が終わると白は瞳を爛々と輝かせ、もう1曲もう1曲と姉ちゃんにアンコールをせがんでいる。

すると姉ちゃんがおもむろに僕の方へと顔を向けた。

「じゃあ翔太に頼んでみたら？」

――はぁ？

今は春休み中でその日遅く起きてきた僕は朝昼兼用の食事を取っていたのだが、急に話をふられたせいで口に入れたご飯を喉に詰まらせてしまい、急いでお茶で流した。

そして僕は姉ちゃんを渾身でもって睨んだ。

――ふざけんな。

姉ちゃんは僕の気持ちを知ってて業と話をふっている。

ピアノなんて、見るのも嫌なのに……。

「翔太も弾けるんですか？」

「弾けないよ」

白の何気ない問いに、僕は冷たい態度でソレに触れることを断った。

「あーあ、もったいない。私なんかよりずっと才能あったのにね……」

静かに言った姉ちゃんの言葉は僕を責めているようで胸にチクチクとした痛みが奔る。

けれどそんな挑発には乗らないよ。っていうか乗れないよ。

今の僕では白を感動させれる音色は奏でられない。

胸の奥にしまい込んだ過去が、またしても僕を追い詰める――。

僕も昔はこの音色の虜になっていた。幾重にも重なる音符は未知の世界へと僕を導いてくれた。

そしてそれは僕の夢になった。

小学6年の秋、僕は週2回のピアノ教室に通うのが楽しくて仕方なかった。

学校から帰ると僕の玩具はあの電子ピアノだった。

その日もピアノ教室に通う日で、足早にそこへ向かった。

なぜそんなに急いで向かったのか――その理由は一月前に受けた選考会の結果をいち早く知りたかったからだ。

それは全国大会への出場券をかけた選考会で、倍率はとても高い。そしてその結果が発表されるのがその日だったのだ。

選りすぐりの幼きピアニストがそのセンスと才能を披露する華やかな舞台――全国大会。

僕の通う教室からは2人がその選考会に挑戦していた。

まず2人とも選ばれることはないだろう。僕か彼か――どちらも選ばれない可能性もある。

選考会には他の教室からもたくさん来ていたのだから狭き門に違いはない。

ため息が漏れるような演奏を弾いた見知らぬ少女の顔がチラつく。

息を切らせ教室に飛び込んできた僕に先生は笑顔で迎えてくれた。

結果を聞いた僕は飛び上がる程嬉しくて先生の指導も自然と熱いものになっていった。

だけど――

あいつが僕に言ったんだ。

『なんで君なの？

僕は3歳の時から英才教育を受けてきたんだ。

4、5年触っただけの君にこの僕が負けるはずがない。

教えてあげようか？

なぜ君が選ばれたのか。

君のお父さんのおかげだよ。あの選考会の審査員には君のお父さんに命を助けてもらった人がいたんだよ。

その恩返しに君が選ばれたんだ。

君は辞退するべきだ』

僕に衝撃の言葉を告げてきたのは何かと僕をライバル視してくる1つ年上の嫌味でキザな奴――僕と同じく選考会を受けたもう一人の生徒。

姉ちゃんは相手にするなって言ったけど僕は辞退した。

自分で自分の手を傷つけた。

カッターで自分の右手を切りつけた。

右手から真っ赤な鮮血がぽたりと落ち、同時に僕の夢もゆっくりと指を擦り抜け落ちていった。

そして親父に対するコンプレックスは最大なものとなり今だに僕の背中に重くのしかかっている。

押し入れに仕舞ったあの電子ピアノは僕の嫌な思い出と同時に引っ張りだされてきたのだ。

嫌な過去に心沈んだ僕は早くこの場から退散したいとご飯を掻き込む。もう味なんてしない。

そんな僕を白の黄色い瞳はすべてを見透かすように映している。

その時だった。

宇宙船から洩れてきた交信音に空気が変わる。

ガラス戸を開けっ放しになっていた居間でその音ははっきりと聞こえ、白はいつもと同じように宇宙船に潜っていった。

またあの司令官と密談か？　と思っていたら予想以上に早く白が宇宙船から出てきた。

そして白は宇宙船の横に立ち、床に座る姉ちゃんと食卓テーブルで食事中の僕に大きい瞳を向け、そして言ったんだ――。

「帰る日が決まりました」

僕の胸にスーッと何かが吹き抜けて行った気がした。
それは暖かな春の風なんかじゃなく秋風のような憂愁の風。

僕は口に含んだご飯を飲み込むこともできずに、お茶に手を伸ばすことさえも忘れていた。

第１０話　憂愁の燈

白が帰るその日を一週間後に控えた日、僕はめずらしく親父に電話をしていた。
あるお願いを聞いてもらうために――
「分かった。なんとか都合をつけよう」
僕が親父に頼みごとをしたことなど何年ぶりのことだろう。
僕からの急な電話に、親父も驚いている様子だったがすぐに事態を把握し、快く僕の願いを聞き入れてくれた。とりあえず一安心だ。
この家に来た日から白はずっとこの狭い家で過ごしてきた。
きっと窮屈だったに違いない。
だから最後に一度だけ、外に出してあげようと計画したのだ。
そのためにはどうしても大人の力が必要だった。この場合親父に頼むしか選択肢はない。
勿論この計画は、白の知らないところで進められた。
白にはその時までの秘密なのである。
そしてその白はというと、姉ちゃんから文字を習っている。
けれど優秀なはずの白にも苦手なものはあるようで、いくら教えても平仮名さえまともに書けなかった。何度も姉ちゃんから間違いを指摘されてた。
「姉ちゃんはさっきから何を作ってるんですか？」

姉ちゃんは白に文字を教える傍らで大きな黒地の生地を広げ、縫い合わせている。
それを不思議に思った白が訊いた。
「うん、ちょっとね」
姉ちゃんは含み笑いをし、白の書いた文字に目を落とす。
「また間違ってるよ。濁点は右上に点が二つだってば」
「えー？　どれですか？」
「ほら、ここ」
姉ちゃんに指摘され頭を抱え悶える様子はまるで昔の僕を見ているようで可笑しかった。
僕も昔、姉ちゃんに勉強を教わってあんな風に指摘され頭を抱えてたっけ。
こんな可笑しな光景を見るのもあと少し――。
窓の外は生憎の雨。
僕は窓辺に立ち、日を跨ぐ頃には止んでほしいと切に願った。
その日の夜、親父が１０日ぶりに帰ってきた。

玄関前には一台の乗用車が停まっている。背の高いワゴン車だ。
親父が職場の人に頼んで一晩だけ借りてきたらしい。
幸い白には気付かれなくて、僕たちは静かに夜が更けるのを待った。

深夜0時、僕の願いが通じたのか、いつの間にか雨は上がっていた。
カーテンを開けると眩しいほどの満月の光が僕の部屋を明るくしている。床に寝ていた白にもその光は眩しかったらしく目を覚ました。

「白、出かけようか」

僕はまだ事情のつかめていない白に、黒いフードを渡した。

「これは……」

「そう。昼間姉ちゃんが作ってたやつ。それ着たら下にきて」

僕は一方的に必要最小限のことだけを説明して居間へ下りると、居間には親父と姉ちゃんが一睡もせず待っててくれていた。

それから数分後、黒いフードを被った白が下りてくる。大きい頭から黒いフードを被った白は差し詰め不気味な黒頭巾ちゃんといったところだろうか。
フードといっても生地の端を縫い合わせて首の位置に一本の紐を通しただけのお粗末なもの。だけど急遽仕上げたモノにしては上出来だ。

白は窮屈そうにしてたけど、たとえ夜中であっても何処で誰が見てるか分からない。

そう、白を連れ出す行為はとても危険な賭けだって分かってる。

それでも白を連れていきたい場所――。

「さぁ、早く乗って！」

「あの……」

「話は後、後！」

僕は強引に白を車の後部席に押し込め、すでに運転席でスタンバイしていた親父に目的地を告げた。

春を迎え、大分暖かくなってきたとはいえ、夜はやはり冷え込む。

妊婦の姉ちゃんにはこの寒さは堪えるだろう。

それでも姉ちゃんは一緒に行きたいと言ったが、身体を冷やしてはいけないと親父に諭されて姉ちゃんは留守番することになった。

姉ちゃんに見送られて走りだした車内では、一人把握できていない白だけが頻りに訊ねてくる。

「何処へ向かっているんですか？」

「なんとか言って下さいよ」

不安げな白に僕はいい所だよとだけ伝える。

さすがに夜中だけあってどの道も数えるほどしか車は走っていない。

その数は小道に入れば入るほど少なくなり、目的地に着いた時には人影さえ一つもなかった。

街の明かりは遥か遠くに見え、ここは街灯一つない静かな場所だった。

僕が白を連れて来たかった場所――それは桜の木々が立ち並ぶ河川敷。

いつだったか白が言った。

桃色に染まった河川敷を歩いてみたいと――

ずっとその言葉が離れずに僕の中に残っていたのだ。

そして、いつか本当にそんな日がくればいいなと思っていた。

「白、行こう」

僕は白の手をとり、車を降りた。

親父は僕に気を使ったのか車内から出てこなかった。

二人で見上げた桜は満開のピークを過ぎ、散りぎわの哀愁を漂わせている。けれど昼間の雨で濡れた薄桃色の花びらは満月に照らされて有終の燈を灯し、あっという間に僕たちを魅了していった。

キラッと一瞬の輝きをみせて落ちていく一粒の雫は、どんな宝石よりも綺麗で自然の前に人はとてもちっぽけな存在なんだと思い知らされる。

フゥーと一陣の風が吹き、落とされた花びらはヒラヒラと空を舞い、僕の肩に落ちた。

白は人目を気にすることなく被っていたフードを外し、瞬き一つせず目の前に広がる絶景を瞳に焼き付けているようだった。

白の大きな瞳もまた満月の光が反射して妖艶な輝きをみせていた。

キラリと黄金色に輝く白の瞳から零れ落ちる大粒の涙。

白は溢れてきた涙を拭くこともせず、ただひたすらに桜を見上げ、静かに口を開いた。

「私もこの桜のように、散り際まで燈を灯し続けることができるでしょうか……」

僕にはその意味が理解できなかった。

「翔太、ありがとう。
君と見上げたこの桜を私は一生忘れません。
絶対に、忘れませんから……」

桃色に染まった河川敷を二人で並んで歩いた。

まるで恋人同士のように。

いつまでも別れを惜しむかのように。

暗闇を照らすのは夜空に浮かぶ満月の光だけ。

満月には不思議な力があるのだという。

この満月は知っていたのだろうか。

僕たちに襲いかかろうとしている嵐がすぐそこまで来ていることを――

翌朝、目を覚ますとベット横の床に敷かれた布団はすでに畳まれていた。どうやら寝坊したのは僕だけのようだ。

階段を降りると聞こえてくる二人の会話。

「え？　なぜ翔太がピアノを辞めたか？　どうしたの急に……」

食卓の椅子に座り、果物ナイフで林檎の皮をむいている姉ちゃんに白が僕の過去について訊いていたところだった。

僕は廊下に立ち尽くす。なんだか足の爪先から冷えていく感覚。

もう僕の過去には触れてほしくないのに。

「――今の翔太を花に例えるなら、まだほんの小さな蕾です。これからどんな花を咲かせるは彼次第。
彼にはたくさん光を浴びて可憐に咲き誇ってほしいんです」

白は窓際に座り足だけ庭にほうり出している。
その日は昨日と打って変わって春晴れの陽気だった。
１匹の雀が白の前を横切り隣りの家に咲いた梅の小枝にとまるのを目で追いながら白が言った。

姉ちゃんからは白の丸まった背中しか見えない。
けれど白の優しさは胸の奥まで伝わったのだろう。姉ちゃんはその背中に微笑する。

けれど僕には鬱陶しくて――。

「あの子は弱いのよ。
いろんなことから逃げてきた。お父さんからもピアノからもね」
「どうしたらまた以前のように夢を持ってくれるでしょう？」
「さあね」
「本当に捨ててしまったのでしょうか？」
白が僕の将来を心配して言ってくれていることくらい分かっていた。

だけどそんな白の言葉はただ重たいだけで、僕の胸を心底からイライラさせた。黙って聞いていることもできないくらいに。

「余計なお世話だよ」

僕は居間に入ると、冷淡な言葉を無意識に発していた。

そしてイライラを持て余していた僕は姉ちゃんが剥いた林檎を口にほうばる。

すると背中を向けていた白が立ち上がり僕の方に身体を向けた。

今度は僕が白に背中を向けて食卓の椅子に座る。姉ちゃんとは向かい合う形になった。

「余計なお世話？」

僕の背中から聞こえる白の声色に困惑が混ざる。

けれど僕は気にせず冷淡な言葉を続ける。

「そう。夢なんてさ、子供が見るもんなんだよ。宇宙人の白には分からないだろうけど、現実はそう甘くないんだよ」

この時の僕は素直じゃなくて、一生懸命に必死にもがいてる奴らを恥ずかしいと思ってた。

「はい、この話はこれでおしまい！

白も一緒に林檎食べようよ。おいしいよ」

僕の言葉が白の心を傷つけたとも知らず、僕は勝手にその話題にケリをつける。

けれど白は気持ちを押さえ込めずに感情を顕にした。

「私は悔しいです……。なぜあなたはそんないい方をするんです！
……ずるいですよ……」

いつもと違う白の声音に僕は振り返り、この日初めて白の顔を見た。

白は庭に仁王立ちし、両手にはぐっと握りこぶしを作っている。
身体全体を覆った艶のある柔毛は逆立ち、怒りを顕にしていた。
そして黄色の大きな瞳にはじわりと滲む涙。

そんな白を見るのは初めてだった。

「だってそうでしょう？
あなたには、やりたいことがあって、やらなければならないことがあって、そしてその術（すべ）を知っている。
翔太には環境もある。自由もある。時間もある。
なのに、あなたはことごとく自ら潰している！」

怒りとも悔しさともとれる涙声の叫びが戒めの槍となって僕の胸を突き刺す。

「お父さんからも逃げてピアノからも逃げて、ずっと下を向いて歩いていく気ですか？」

白の口からもたらされた親父というキーワード。
それは僕の逆鱗に触れた。僕の内側からもふつふつと怒りが込み上がってくる。

僕はダッダッと早足で白の側まで歩み寄と白を睨み付けた。

「親父がなんだって？　僕がどれだけ親父の影に苦しめられてきたか、知りもしないくせに偉そうに説教なんかすんな！」

普段は白が僕を見下ろしている。

けれど庭に立つ白と家の中に立つ僕とでは、目線は僕の方が高くなる。

僕は白を見下ろしていた。

少し優越感も感じて、重ねて浴びせ続ける罵声。

「親父の息子ってだけで勝手に優秀だって決め付けて、勝手に期待して、勝手に裏切られて、皆勝手すぎんだよ！　誰がそんなこと頼んだよ！？

僕が逃げてるって？

逃げれるもんなら逃げたいよ！　それで楽になれるならとっくの昔にそうしてるよ！

王様の息子に生まれて、自由気ままに生きてきた白に僕の気持ちは分からない！

永遠に白には分からないよ！」

僕の心からの叫び。

僕はいつも親父と比べられてきた。いつも親父の影が僕の周りをウロついていた。

そして決まってその影に押しつぶされるのだ。

親父の息子だから、親父の息子なのにと他人の眼が僕を追い詰め

るのだ。

もう、うんざりだった。

腹の底から一気に込み上げた怒りは次から次へと口から吐き出された。

息を吸う間もなく大声を張り上げた僕ははぁはぁと肩で息をしていた。

一気に険悪ムードになったその場を姉ちゃんだけがおろおろとなりながら心配そうに見守っていた。

白は目を逸らすことなく僕をじっと見上げている。

そして静かに言った。

「そんな気持ち、分かりたくもありません」

白は僕の心からの叫びを“そんなこと”で片付けた。

ドンと突き放された気がして虚しくなった。

もう白と一緒にいる時間は少ないのに、喧嘩なんかしてる場合じゃないのに――僕と白の間には大きな溝ができてしまった。

第１１話　未来なき星

白と喧嘩した次の日。
僕はその日、白のすべてを知った。
なぜ地球に来たか。
なぜ桜の前で泣いたのか。
なぜ僕にあんなことを言ったのかを――

昨日、白と喧嘩してから一切口をきいていない。
このままではいけないことは分かっている。
でも、仲直りの仕方をしらない。
今までに誰かと本音をぶつけ合って喧嘩した経験など一度もない。
友達といっても世間話やゲームの貸し借りする友人が2、3人いるくらいで、上辺だけの付き合いだ。

そんな付き合いしかしてこなかった僕が居間で一人、どうやって白と仲直りしようかと思案している時だった。
庭から電子音が聞こえてきたのだ。母船からの交信音だ。

白はその時、姉ちゃんの部屋にいた。
姉ちゃんが部屋にあるテレビの映りが悪いと言ったら、白が直せるかもと言ったのが切っ掛けで今も修理中である。

「おーい、白ー！」

僕は重い腰を上げ、階段の下から白を呼んだ。

――……

全く応答はなく、その上姉ちゃんが掃除機をかけだしてウイーンという吸引音によって僕の声は消されてしまった。

「ったく……」

知らないからな、と僕は居間に戻り、すとんとソファに腰を下ろすも、やっぱり知らない顔などできなくて――。

「なんだよ、もう……」

なんだか白に無視された気分になって寂しくなった。

正面に見える宇宙船は頻りに主を呼んでいる。

主人とは勿論、白のことだ。

だけどその時のコールは僕を誘っているように聞こえ、僕はその誘惑に負けた。

無性に誰かと話したくなっていたせいもある。

話し相手として頭に浮かんだのは、一度だけ話をしたことのある“彼”のことだった。

僕は青いシートを潜り、あの時と同様にして宇宙船に乗り込んだ。

中に潜ると相変わらず薄暗く、頻りに鳴っている電子音はより一層大きく聞こえてきた。

僕の顔を照らすのは操縦席の前にあるモニターの光だけ。

「えっと……どうやるんだっけ？」

操縦席の前に広がる幾つものボタンを前に、やはり白たち宇宙人の知識と技術は凄いものだと思った。

この黒い鉄のような塊が一体どのような仕組みで空を飛べるというのだろう。

そんなことを思いながらあの時の白の仕草と同じように左端のレバーを引き、手前の赤いボタンを押した。

すると何も映されていなかったモニターに影が映った。

映った影の正体は予想どおり、彼だった。

“彼”とは白の上司である総司令官殿だ。

「ぬわっ！？」

彼はあの時と同様にひどく驚いていた。

身体を仰け反り、その勢いで座っていた椅子ごと後ろに倒れ、画面から消えていった。

“あの時”とは僕が初めてこの宇宙船に乗せてもらった日のこと。

そして彼は僕が知る白以外の宇宙人だ。

「ごめんなさい！　驚きましたよね？　大丈夫ですか！？」

かろうじて上半身を起こしたのだろう、僕からはぴくぴく動く耳だけが画面の下ぎりぎりに見えるだけ。

「ご心配なく」

彼は画面の前の定位置につくと、動揺を隠すようにコホンと咳払いをし、何もなかったかのように平然を装った。

「それで王子は？」

「えっと……今ちょっと手が離せない用があってここにはいません。何か急用ですか？」

彼は細長い髭をピン、ピンと手で整えている。以前にもそんな仕草を見た気がした。どうやら彼の癖らしい。

「急用ではないんですが……」

彼は語尾を濁した。

この前も自分の一言で僕と白が揉めそうになったことを気にしているのだろう。

「伝言があるなら僕から伝えるけど？」

僕は彼の警戒心を解くように軽い口調で言った。というか本当に軽い気持ちだった。

白と話しをするキッカケが欲しかったのだ。

だからまさか彼の口からそんな重い言葉が出てくるとは、これっぽっちも考えていなかった。

「そうですか？　では――葬儀が無事に終わったと、それだけ伝えて頂けますか」

――え？　葬儀って？

「では私はこれで」

「ちょ、ちょっと待って！」

僕は、交信を切ろうとする彼を引き止めた。

だって、彼の言った伝言は、はい分かりましたって簡単に引き受けられる内容じゃない！

「葬儀って、誰か……亡くなったの？」

僕の問いに彼はかたい表情のまま何も答えてくれない。

僕の頭に浮かんだのは一人しかいなかった。

「白の……お父さん？　――王様が亡くなったの！？」

彼は僅かに視線を下に落とした。

「なんとか言ってよ！」

僕は前のめりになってぐっと顔をモニターに近付ける。

彼は重い沈黙の中、深いため息の後コクンと頷いた。

「いつ！？」

僕は間髪入れずに問いただす。

彼はもう隠せないと観念したのか大きく息を吸い、そして吐き出

すと重い口を開いた。

「3日前です。ずっと床に伏せっておいででした。なんとか王子が戻るまではと頑張ってましたのに……全くあの病気の恐ろしさを痛感します……」

彼は絶望感でいっぱいにした顔を手で覆った。

3日前に白のお父さんが死んだ――！？

3日前と言ったら、桜を見に行った前日だ。

桜の下で流した涙は父親を亡くした悲しみの涙だったのだろうか。それとも側にいてあげれなかった悔やし涙――？

「せめて逝く前にもう一度会わせてあげたかったです。あと少しだったのに……無念でありません。

王を独りで逝かせてしまったと王子が自分を責めてなければいいのですが……」

彼の瞳に滲む悲しみと悔しさ。

「独り……？」

僕は彼の言葉が気になった。

“独り”とはどう意味だろう。

他に家族は？　確か白には2人の兄がいたはずだ――

「ほんとに王子は何も話してないんですね」

まったく彼の言うとおりだ。
白は何も話してくれない。
僕は何も聞いてない。
僕は何も知らない。
「教えてください。もうそこまで話したんだから、どっちみち同じでしょ？　あなたから聞いたとは絶対に言いませんから！」
彼はまた深いため息を一つつき、分かりましたと言って話してくれた。
「王子が地球に来た目的は聞きました？」
「はい。地球の生態を調べにきたんですよね」
「ではなぜそのようなことをしてるかは知ってますか？」
僕は首を横に振った。
調査の理由なんて、全く気にしてなかった。
「私たちのいる星を第二の地球にしようとしているからです」
「第二の地球？」
唐突の告白に僕は頭が真っ白になる。
「もっと分かりやすく言えば、この星を地球のような住みよい星にしたいんです」

「あの、分からないんですけど……。だってあなたたちは地球よりも豊富な資源を持ってるじゃないですか。この宇宙船を見れば一目瞭然ですよ。技術だって人間には到底真似のできない技量です。どう考えても立場が逆だと思うんですけど」

確か白にも似たようなことを言ったなと思い出した。

（白たちは凄いよね。何万光年と離れた地球に来れる技術を持ってるんだから）

その時、白は何て言ったんだっけ？

「確かに私たちの開発技術はどの星よりも進歩してるでしょう。けれどそれだけなんです」

そうだ、思い出した。

白も同じことを言ったんだ。

（それだけですけどね）

彼の言葉と白の言葉が同調する。

「此処には地球のような青い海も緑の大地も、赤や黄色の花々も幾多の生物もいないんです。――というか、なくなってしまったんですよ。全て、ね。そんな何もない中で科学だけが盛んな星なんて未来があると思いますか？」

彼は自問自答するかのように、ブンブンと首を横に振った。

「未来なんてないですよ。その先に待っているのは“死”だけです」

——死、だけ。

思ってもみなかった世界だ。

つまり彼らの星はもう長くない。滅亡しようとしていると言っているのだ。

そして白は死を覚悟で星に帰らなければならない。

星と共に、仲間と共に死ねるなら本望ってこと？

足がガクガクと震え、立っていられなかった。

ストンと後ろにあった操縦席に座った。いや、座ったというか落ちたと言った方が正しい。

「その上、悪疫が流行(はやり)だし家族や友人が次々死んでいくんだ。目に見えない恐怖がすぐ隣りに潜んでいる日々、先に待っているのは破滅しかない未来。そんな生活を私たちは過ごしているんです」

「何か……手はないんですか？」

やっと絞りだした声は震えていた。

「勿論、全総力を持ってやれることはしましたとも。——けれど何も手が見つからない。

今私たちが出来ることは地球を調査し、この星に何が足りないのか、地球にあって此処にないものはなんなのか、悪の根源がなんなのか、それを調べること。

そして最終目標は此処に第二の地球を造ること。

けれどそれも――もうほとんどの者が希望を失ってしまい、夢物語だと本気にするものは少ないがね」

彼はまた一つため息をついた。

もう希望さえも抱けないほど、彼らは絶望の淵にいるのだと感じた。

「強い意志を持って、期待を捨てないでいたのは王子だけでした。

王子だけは何に対しても一生懸命だ。

悪病で2人の兄を亡くしても、王妃が亡くなった時も気丈に振る舞い、私たちを励ましてくれました。

一番辛い想いをしているのは他の誰でもない、王子自身のはずなのに……。

私たちはそんな王子の姿に勇気づけられました。

そして王子のサポートをしようと立ち上がったのです。

たとえ無駄だったとしても――最後まで」

彼は涙混じりに語ってくれた。

そして僕の目にも溢れる涙。

――ああ、だからか……。だから王族の身でありながら調査員なんてやってるんだ……。

ふと桜を目の前に、白が言ったあの言葉を思い出した。

（散り際まで燈を灯し続けることができるでしょうか）

つまり、最後まで希望を捨てることなくいられるか、誰よりも強くいられるか、そのために何ができるのかと自分自身に説いていたに違いない。

「話してくれてありがとうございました。
もっと早く話し聞きたかったけどね……。――実は昨日、喧嘩しちゃって……全部僕が悪いんですけどね。
来週帰るっていうのに……」

僕は自嘲気味に笑った。
本当に自分が嫌いになりそうだ。

「え？　来週？　それは何かの……」
「あ、愚痴っぽくなってすいません！　白にバレるといけないし、そろそろ切りますね。じゃあ」

僕は一度にたくさんのことを聞いて半分パニック状態だった。

しばらく独りで整理したい気分だった。

彼はまだ何か言い掛けていたのに、僕は最後まで聞かずに交信を切ってしまったのだ。

それはとても大事なことだったのに――。

第12話　後悔の渦

僕は近くの公園に来ていた。

象の形をした滑り台や、その下には小さな山ができた砂場があり、風に押されたブランコがキーキーと音を立てながら僅かに揺れている。そしてそれらの遊具を囲うのは桃色の蕾のつけたツツジの垣根。

誰もいない公園のベンチに腰を下ろし前かがみになった僕の目に写るのは、茶色の土肌と風に舞う花びらだけ。

どこから吹かれてきたのか、桜の花びらが地面すれすれで舞っている。

青空が澄み渡る春晴れのこの日、静かな公園には穏やかな時間が流れていた。

けれど僕の心の中はその正反対で、嵐のような後悔の渦がグルグルと回っていた。

なぜもっと話を聞いてやらなかったんだろう。

お父さんの病気のこと、家族のこと、星（くに）のこと。

いくらでも訊ける時間はあったはずなのに……僕は何も訊かなかった。

もし訊いていたら、もっと白を知っていたら、あんな言い合いになることもなかったのに。

白を傷つけることもなかったのに。

僕が抱えていた悩みなんて塵みたいなもんだ。比べるに値しない。

なのに僕はひどい言葉を白に投げ付けた。

自由気ままに生きてきたと、幸せな奴だと勝手に決め付けた。

他人に勝手に決め付けられて散々嫌な思いをしてきた自分が、白に同じことをしてたなんて――最低だ！

ほんと、僕は最低な人間だ！

その日の夜、結局白とは一言も口をきけないままベットに入った。

白は何度も僕に何かを言おうとしていた。

公園から帰ってきた時も、夕飯の時もずっと僕の機嫌を伺っていたのだ。

チラチラと白の視線が刺さる度に僕の胸は痛んだ。

あっさり、ひどい事を言ってごめんなさいと謝ればどんなにか楽になるだろう。

けど、そんな一言で済まされることじゃないし、済ませてはいけないと思うとどうしてもその一言が言えなかった。

僕はその夜、白を避けるようにして早めの就寝をとった。

掛け布団を頭からこっぽりと被り、必死に眠ろうと目を閉じるがなかなか寝付けない。

僕が寝てる隣の床には布団に包まった白がいて、眠っているのか寝返り一つしていなかった。

そして僕は頭から被っていた布団が次第に息苦しくなってきて、頭を出そうとした時、

「翔太、起きてますか？」

と、真っ暗な部屋に白の声が響いた。

僕は咄嗟のことにドキッとして、押し黙ってしまい必要以上に潜める呼吸。

まだ心の整理ができていなかったこともあっての行動だったと思う。

布団から顔を出すタイミングを逃した僕は、寝たふりをするしかなかった。

それでも白は構わず口を開いた。

「――私はこの3ヵ月、ずっと地球の素晴らしさを実感してきました。

ここには青い海や空があり、眩しい太陽に緑の大地、そしてあの桜のような鮮やかな花々が存在する。

私の傍にはいつも翔太や姉ちゃんがいて、毎日が新しい発見でとても楽しかったです。

正直、自分の置かれた立場を忘れそうになったこともありました。

このまま此処に居たいと思ったこともあります。

けれど、人間がこの地球から離れて生きていけないように、やはり私も星（くに）を離れては生きていけないのです」

白は独り言のように話し続ける。

「私にはやらなければいけないことがあるんです。それは途方もないことだと分かっています。
もう何をしても手遅れかもしれない、残された時間は僅かかもしれない。
それでも何もしないではいられないのです。
たとえ同じ結果しか待っていなくとも、やれるだけのことはやってみるつもりです」

布団を頭から被っている僕からは白の表情は分からない。
けれど白の声は真っすぐで熱いものだった。

「だから翔太も前を向いて歩いてほしい。夢を掴んでほしい。
どんなに翔太から綺麗事だと言われようとも、私はこの意見を変えるつもりはありませんよ？」

ひねくれた性格の僕には、その真っすぐな白の言葉は正直キツかった。

今更僕に何を期待してるの？

僕は苦々しい思いでシーツをぎゅっと握った。

けれど白の声は更に続いて、僕の胸に響いた。

柔らかい声質は、ずっと聴いていたいと思わせるほど温かい。

「実は雷に撃たれたあの日、私は自分の最後を覚悟してたんですよ？
あぁ、このまま死ぬんだろう、たとえ助かっても無事では済まない

だろうと覚悟していたんです。
けれど翔太は手を差し出してくれた。震える私の身体を拭いてくれた。
――嬉しかったです。
翔太に助けられた命です。大事にします。翔太、本当にありがとう。
特別な時間をありがとう。
――ありがとう」
柔らかくて温かい白の声音はとても耳心地のよいものだった。
まるで幼い頃母親が唄い聴かせてくれた子守唄のようで、僕を安らかな眠りへと導いてくれた。
それはとても気持ちのよい眠りだった。
僕は明日こそは勇気をもってごめんと謝ろうと誓いながら眠りについた――。

翌朝、午前7時――
「翔太！　翔太！　起きて！　早く起きて！」
昨晩の心地良さとは打って変わって、朝の目覚めは最悪のものだった。
姉ちゃんが容赦なく僕の身体を揺さ振る。

「大変よ！　白がいないの！
白がいなくなっちゃたよ！」

姉ちゃんの叫ぶような声に虚ろな意識は一気に覚醒し、がばっ！
とバネでもついたかのような反動で上半身を起こす。
見上げた姉ちゃんの顔はひどく困惑していて、焦慮の色を濃くしていた。
そんな姉ちゃんの顔を目の前に、僕は白がいなくなったという現実を認めざるを得ない。

そして次に僕の目に飛び込んできたのは、白が寝ていた布団。
その布団は部屋の隅に三つ折りで畳まれていた。

そんなことはいつものことだった。
白はいつも僕より早く起きていたし、部屋の隅に綺麗に畳まれた布団を見て礼儀正しい奴だと何度感心したことだろう。

けれどこの日は少し違っていた。

その畳まれた布団の上に一枚の便箋が一つ折りにされて乗っている。
僕はベットから身体を起こし、その便箋を手に取ってゆっくりと開いた。

「……なんだよこれ」

それを見た瞬間、僕は悔しさと虚しさで手が震えた。
隣で覗き見ていた姉ちゃんも、そんな……と呟きながら両手で口

を押さえる。

そこに書かれていたのは、たったの一言。

『　ありがとう　』

あの丸い手で鉛筆を握るのは難しかっただろうに。

不恰好でよれよれの文字。

大小バラバラの文字。

「……けんなっ！」

ふざけんな！　って叫びたかったのに、いろんな感情が同時に込み上げてきて声にならない。

このたった一言を伝えるためだけに一生懸命鉛筆を握っていた白の姿が瞼に浮かぶ。

このためだけに姉ちゃんから文字を教わっていたの？

この一言を残すためだけに――

昨晩の白の言葉はお別れの言葉だったの？

昨晩の心地よい白の声音が鮮明に耳の奥に残ってる。

（ありがとう）

なんでだよ！

それは僕の台詞だろうが！
その言葉を言わなければいけないのは僕の方だ！
僕はまだ何も伝えてない。
ありがとうも言えなかった。
さようならも言えなかった。
ごめんなさいさえも言わせてくれないの？
こんな最後ってないよ。
喧嘩別れなんて嫌だ！
僕は今にも転げ落ちそうな勢いで階段を駆け下りると、居間を通って庭に出た。
そこにはもうあの宇宙船はない。
裸足で立ち尽くす僕の目の前にあるのは、ぽっかりと空いた直径約１メートルの穴。
白が落ちてきた時に出来た穴だ。
深さ３０センチほどのその穴は、まるで僕の心の中を象徴するかのように虚しく空いていた。
なんでだよ……。
帰るのは来週だって言ったじゃんか！
なんでそんな嘘つくんだよ！　卑怯だろ！

便箋を持った手にぐっと力が入って、くしゃっと紙の擦れる音がした。

ちゃんと謝るつもりだったのに……
ちゃんと仲直りしたかったのに……

星のこと、家族のこと、もっと話したかったのに……

もう君はいない。
僕の隣に君はいない。

涙が溢れて止まらない。
涙が喉に詰まって息苦しい。

涙ってこんなにたくさん出るんだ……。

知らなかったよ。
涙って、こんなに塩っぱいんだ。
涙って、こんなにたくさん出るもんなんだ。

――ねぇ、誰か教えてよ……

この涙の止め方を教えて。

「ばかやろ――！！」

僕は土肌むき出しの地面に跪き、天に向かって大声で叫んだ。

それは卑怯な別れを選んだ白に対して――

そして何も伝えることのできなかった腑甲斐ない自分に対して――

その時見上げた空は僕の複雑な心とは裏腹に――鮮やかな青色だった。

第１３話　真夜中の訪問者

僕はその日、白が大好物だったプリンを姉ちゃんと二人で食べた。プリンは甘い食物のはずなのに、涙混じりに食べたその日のプリンは塩っぱかった。

もし白が僕の前に現われなかったら、こんな塩っぱいプリンを味わうことはなかっただろう。

「白、私たちに見送られたくなかったんだね。別れが辛くなるから……」

姉ちゃんが独り言のように言う。

僕は黙っていた。

僕はスプーンを口にくわえながら、昨日の宇宙船でのことを思い出していた。

確か、僕が交信を切った時、彼はまだ何か言おうとしていたよな、と。

（来週？　それは何かの……）

その続きはきっと――

（来週？　それは何かの間違いでは？　迎えにいくのは今夜ですよ――）

きっと彼はこんな感じのことを言おうとしてたんだろう。

――なのに僕は……。

ほんとに僕は何をやってもダメだなーと深い自己嫌悪に陥る。

僕は姉ちゃんに話を聞いてもらうことにした。

「白、あっちの星の王子様なんだって。しかも滅亡の危機にある星のね……」

なんの前触れもなく僕が話し出すもんだから、姉ちゃんは目を丸くした。

なぜ僕がこんな話をするのかと不思議に思っただろう。

僕は姉ちゃんにも伝えなければいけないと思ったのだ。

白の想いや、その真意を。

姉ちゃんはそんな僕の想いを汲み取ってくれたのか、何も言わず静かに聞いてくれた。

「白が帰っても家族はいないだ。皆、死んだんだって。自分の周りで次々と生命が落ちていくのを白はずっと見てきたんだ。だから姉ちゃんのお腹の中に新しい生命が宿ったと知った時、白は嬉しかったんだと思う。だから自分のことのように喜んだ。必死で応援してくれた。迷ってる姉ちゃんの背中を押してくれた。

その子は白にとっても希望の光だったんじゃないかな？
明るい未来を見たんじゃないかな？
僕はそう思うよ」

僕が話し終えるのと同時に、姉ちゃんの頬に一筋の涙が伝う。

この時の僕はまだ知らないことだが姉ちゃんと白の間には一つの秘密があった。

それは白の能力のこと。

相手の心を覗くことのできる力。
それは白が決して使うまいと決めていた秘密の力だった。

だけど一度だけ使った時があったという。

それは姉ちゃんが妊娠し、独りで悩み苦しんでいた時だった。

白は人の心の中に入った。
してはいけないことだと分かっていたのに、それでも自分を止められなかったのだ。

白が堅い決意を捨ててまで救いたかったもの――

それは新しい生命だ。

白によって姉ちゃんも小さな生命も救われたんだ。

姉ちゃんは涙で濡れた顔を自分の膨らんだお腹に向け、守るように両手を添える。
姉ちゃんは何も言わなかったけど――白、ありがとうと言っている姉ちゃんの心の声が聞こえてきそうだった。

『ありがとう』

そういえば、白が初めて僕にかけてくれた言葉も“ありがとう”だったっけ。

このありきたりな言葉がこんなにも温かいものだったなんて、知らなかったよ。

僕はくしゃくしゃになった便箋をそっと伸ばした。

白から貰ったたくさんのことは僕も忘れないよ。

決して忘れない――

それから3ヵ月後――

僕は空を見上げるのが癖になっていた。

今も地球の何処かの空を飛んでいるに違いないと思うと、つい探してしまうのだ。

けれど見上げた空は青々とした夏空で黒い異物などあるはずなか

った。

「やばっ、練習時間なくなるっ」

学校の校門にいた僕は玄関正面にある時計を見上げ走りだす。

僕が向かう先は音楽教室。

僕はまたピアノを始めた。

そのことは姉ちゃんも親父も、そして教室の先生も喜んでくれた。

ようやく僕は真実と向き合う決意をしたのだ。

「正直に教えてください。あの時、選考会の審査員には親父に助けられた人がいたって本当ですか？　だから僕は選ばれたんですか？」

ずっと聞きたくて聞きたくなかったこと。

「やっぱりそのことを気にして辞めてしまったのね」

防音設備の整ったピアノ教室の一室で、静かにため息をついたのは、当時僕を指導してくれてたピアノの先生。

５０歳は過ぎたであろうその顔は当時に比べ、皺が幾分増えただけで、温和な雰囲気は全く変わっていなかった。

パーマのかかった黒髪を一つ纏めにし、少したれた目は笑うとより一層たれ目になったことをよく覚えている。

「誰から聞いたかは知らないけど、それは本当よ。交通事故で救急車で運ばれてきた彼女を処置したのがあなたのお父さんだと聞いた

ことがあるわ。
けれど彼女がそのことを知ったのは選考会の後よ。
自分の恩人の子供があの場にいたことなど彼女は知らなかったわ。
それに、もし知っていたとしても、そんな不公平な採点を彼女がするはずないわ！」

先生は僕をじっと見つめ、視線を外すことなく強い口調で否定した。

僕はその言葉を受け、やっと解放された気がした。

僕はこの言葉が聞きたかったんだ。

誰かに違うと強く否定して欲しかったんだと実感した。

もっと早くにこうしていればよかったと思うけど、もし肯定されたら、もう僕の逃げる場所がなくなってしまうと思った。

だから聞くに聞けなかった。聞く勇気が持てなかったのだ。

白の言うとおり、下ばかり見て歩くのは辛すぎる。

もう、逃げたりしない。

僕は5年ぶりにピアノに触れた。

感覚を思い出すのに多少の時間はかかったけれど、久しぶりに触れた鍵盤はとても軽くて動きだした指は止まらなくなった。

その時間は僕の大切な時間になった。

白だって頑張るって言ってた。だから僕も頑張ってみるよ。必死

でもがくのも結構気持ちいいもんだね。

きっと白のことだ、君はもっと頑張ってるんだろうな。

その夜は、綺麗な三日月がくっきりと浮かんだ夏の夜だった。

カチッ……　カチッ……

僕の部屋に小石の当たる音がして目が覚めた。
時計に目をやると深夜の午前2時。
辺りは静かで風の音さえしない。
僕は気のせいかと、また目を閉じる。

すると今度は僕の名前を連呼する声がかすかに聞こえる。

「翔太さーん、翔太さーん」

声を潜めて何度も僕の名を叫んでいる女性の声は、窓の外すぐ近くで聞こえていた。

ここは2階にある僕の部屋だ。
しかもこんな夜更けに一体何が起きているのかと恐る恐るカーテンを開けた。

――――――！！！？

突然僕の目に飛び込んできたのは、宙に浮いた小型宇宙船。そして宇宙船から身体半分出した黒猫――――じゃなくて黒猫のような宇宙人！！

夜闇に漆黒の身体は不気味だった。その中でライトブルーの大きな瞳だけがギラリと光って、僕を捕らえている。

「はぁ～やっと気付いてくれた～」

黒猫はやれやれといった様子でため息混じりに言った。

そしてぷかぷか宙に浮いている宇宙船から身体を全部出すや否や、こともあろうにジャンプして家の屋根に飛び移ってきたのだ。

その屋根とは僕が開けた窓のすぐ下。つまりその黒猫は僕に向かって飛んできたのである。

僕は驚愕して後ろに後退。

黒猫は前足を窓の桟にかけ、後ろ足を屋根につけ豪快に着地し、その衝撃でドーン、ガタガタと激しい音が上がった。

その騒音に誰かが窓の外を見たら最後、猫型宇宙人の存在が世間に知れ渡ってしまう。

そんな最悪な事態だけは避けなければと一瞬にして判断した僕は、必死で黒猫を窓の外から内に引っ張りこみ、宇宙船を庭に停船させるよう指示した。

数分後、僕は一旦閉めたカーテンを数センチ開け、片目で辺りを見回すと、何軒か明かりがついている。

窓を開け、外の様子を気にしている人の姿も見えた。
ただ幸いなことに、あの黒猫も宇宙船も見られてはいないようで、窓の外を覗いているその人は交通事故があったのではと勘違いしているようだった。頻りに車道を気にしていた。

はぁ……、どうやら最悪の事態は免れたようだ。

僕はベットに腰掛け、安堵のため息をつく。
黒猫は部屋の中央でイタタタッと腰の辺りを擦っていてなんとも間抜けな姿だ。

僕はそんな黒猫を見て、全く無茶苦茶するなーと心の中で嘆いていた。

「もぅ、なぜ私がこんな目に……」

それはこっちの台詞だ。

一体、黒猫は何しに此処へ――？

僕が警戒心たっぷりに黒猫を眺めていると、やっと僕の視線に気づいた黒猫が口を開いた。

「あ……かなり怪しんでます？」

こくりと僕は頷く。

黒猫の声は見た目とは想像もつかないほどの可愛い少女の声。

黒猫は姿勢を正すと、神妙な面持ちになり、僕にこう告げる。

「私は白王子の側に仕える者です。

翔太さん、あなたを迎えに来ました」

第１４話　三日月

僕を迎えにきた？

僕の前に突然現われた巨大な黒猫が言った。

「呑気に話をしてる暇はないんです。
後で、きちんと説明しますから、早く身仕度の用意をしてください」

黒猫は早口でそう言うと早く、早く、と僕を急かした。

だけど後で説明すると言われても、いくら身仕度を急かされても
僕はまだピンとこない。

呆然と黒猫を見上げベットに座りこくっていると、黒猫が僕の腕
を掴んで無理矢理立たそうとする。

「何してるんですか！？　時間がないって言ってるでしょ！？」

「だから、なんで！？」

隣りの部屋で寝ている姉ちゃんに聞こえないようにと気にしなが
ら小声で話すが、口調は強い。
ばっと黒猫の腕を振り払う僕。

すると黒猫のライトブルーの瞳が一瞬曇った。

「王子が倒れました。――もう長くないかもしれません」

僕は頭が真っ白になって、思考能力は完全にストップした。

もう長くない……？

あの白が……？

白の笑顔が目蓋に映り、その懐かしさに胸がじんわり熱くなる。

あの優しい笑顔が消えるの？

「王子がうなされながら言うんです。あなたのことを……」

「僕の、こと……？」

「はい。翔太が奏でる音色は何色かと……」

ドクンと心臓が鳴った。

白は離れてからもずっと僕のことを気にかけてくれていたんだ……。

忘れないでいてくれたんだ……。

その白が僕を呼んでいる。

――行かなきゃ！！

白が僕を呼ぶなら、行かなきゃ！！

これを逃したらもう二度と白とは逢えない気がする！

再び回転しだした僕の思考回路は早いスピードで答えを導きだし、動作も機敏になる。

「分かりました、一緒に行きます！
けど姉ちゃんには言ってかなきゃ心配する。少し時間を下さい！」

僕はすくりとベットから立ち上がり、ドアノブに手をかけた。

「分かったわ、5分だけ待ちます。私は下で待ってるから」

黒猫はそう言うと窓を開け足をかけて、当たり前のようにそこから外に出ようとした。

「ちょっ、何やってんの！？　そこ出入口じゃないよ！」

黒猫は窓の縁に足をかけたまま振り替えり僕を見ている。

「え……そうなの？」

黒猫の間の抜けた声。

まさかまた窓から庭に飛び降りる気かよ！？
勘弁してくれ～！！
この非常事態にそんなボケは入らないっつーの！

全く面倒な奴が来たもんだと思いつつため息を一つ。

「こっちに階段あるから、ここから下りて！　絶対、そこから出ちゃダメだかんね！」

黒猫は僕の言葉を受けて肩を窄める。

何がいけなかったの？　とでもいうように。

あの黒猫は天然だと確信しつつ僕は隣りの部屋に向かった。

「白に……逢いに行くのね？」

僕と黒猫の会話は筒抜けだったらしく僕が姉ちゃんの部屋のドアを開けると、すでにベットの上で身体を起こした姉ちゃんがいた。

「うん。今から白のとこ行ってくる！　もう少しで夏休み入るし、それまで学校には適当なこと言って誤魔化しといて！　じゃ、姉ちゃん頼んだよ！」

僕がいなくなる後のことを姉ちゃんに託し、慌ただしく部屋を出た。

身仕度と言われても何を用意していいか分からなくてとりあえず3日分の着替えだけを鞄に詰めて、黒猫の待つ庭に走った。

庭に出るとすでに宇宙船は起動準備を完了していて僕が乗り込むとすぐに宇宙船は浮いた。

起動している船内のフロントは窓がなかったはずなのに透明に透

けて外の様子がはっきりと見える。
あっという間に家並みを見下ろす高さまで上がった。
僕が慌てて蓋を閉めようとすると、姉ちゃんが窓から見上げているのが見える。
僕は顔だけだして、行ってきますと胸の中で別れを告げ宇宙船の蓋を閉めた。

宇宙船はあっという間に上空１０００メートルまで上昇。
「ねぇ、ピアノって何処で手に入る？」
黒猫は操縦席に座り、よたついてる僕に訊いてくる。
「何処って、楽器屋さんとか……あ、でもこんな時間にやってる店なんてないよ？　お金もないし……、簡単に買える代物じゃないよ」
僕はグラつく船内でなんとかバランスを保とうと、壁に手をつく。
僕が触れた壁は案の定カシカシと音を立て硬化していった。
「翔太って天然？　誰がお店で買おうなんて言った？　お店が開いてないことぐらい承知。お金がないことも承知。その上で訊いてんの！」
僕が天然？
君に言われたくないんですけど……

僕はちらりと横目で黒猫を睨んだ。

「それってどういう意味？　まさか盗むの！？」

「人聞き悪いこと言わないでくれる？　ちょいっと借りるだけよ」

黒猫は振り向き、悪戯な笑みを浮かべた。

けれどその表情もすぐに堅くなって、真顔になる。。

「王子の願いを叶えてあげたいの」

その健気な黒猫の横顔に一瞬哀しみの色が混ざるのを見た。

黒猫は心の底から白を慕っている。そして心配してるんだなと感じた。

「じゃあ学校がいいかも。やっぱりグランドピアノじゃないとね！」

僕の提案に、黒猫はパァーと花を咲かせたような笑顔をみせた。

「よーし、母船と合流したら速攻で学校に忍び込んでピアノを拝借しよう！」

黒猫は弾むような声を発し、宇宙船は更に加速した。

僕は不意をつかれてガクッとバランスを崩し、みごとに尻餅をつくはめになった。

やっと黒猫の乱暴な操縦に慣れた頃、白が悪疫にかかり寝たきり状態になっていることを黒猫から聞いた。
そして家族がいない白にとって、今呼ぶ名前は僕しかいないのだとも……。

「悔しいけどね……」

黒猫は切ない声で呟く。

側に仕えている黒猫たちより地球人の名を呼ぶ王子――白。

側にいても何もできない自分が悔しいのか、それとも僕に対して悔しいと言ったのか――それは僕には分からない。

でも多分、両方だろう。

僕の乗った宇宙船が更に高度を上げ雲の中からはい上がるとその真上には黒い機械質が剥き出しの巨大な母船がガーという音を発しながら浮いていた。
なんだか自分の身体が小さくなった気分だ。
まるでミクロ化した僕が昆虫の下敷にされてるようで、黒光りした母船の底は不気味だった。

真下から覗いてる僕からはその全貌は分からない。
ただその大きさは想像を大幅に越えていて、街一つぐらい容易に呑み込んでしまいそうなほど巨大な宇宙船だった。

ぽかんと口を開けて呆気にとられている僕をよそ目に、黒猫は慌

ただしく操縦席前に並ぶコンピューターのキーを叩いている。
すると一分も経たないうちに母船の底にある昇降口が開き、その中から3隻の宇宙船が降りてきた。
そしてそれらを確認すると黒猫は僕に視線を移す。

「学校に案内してくれる？」

僕は頷き、来た路（みち）をまた戻っていった。

きっと学校ならどこでもよかったんだろうけど、僕は自分の通う学校を目指した。
その方が迷わずに済むと思ったから。

学校の上空を4隻の宇宙船が浮いている。

僕は3階にある音楽室の窓を指差すと、窓際まで近付き宇宙船から放出された眩しいライトが室内を照らした。
照らされた室内の隅に黒い幕のかけられたグランドピアノが見える。

「――あれか……」

黒猫が呟くと、交信音が鳴った。
黒猫が交信を取るとモニターに映ったのは虎縞の茶色の猫。
黄色の瞳は少し白と似ていると感じた。

「これは無理じゃないかな？　窓の桟が邪魔だよ」

その声は２０代の青年の声。

するとまた違う猫がモニターに映る。今度は真っ白の身体に赤い瞳の猫だ。

「ぶち抜いちゃう？」

白猫も青年男性の声。

けれど声質はさっきの猫に比べると少し低く刺々しい。

どうやら白猫の気性は荒いようだ。

今度は黒猫がその言葉を聞いて僕に訊ねた。

「ここからあのピアノを盗み出すのは困難だわ。他にいい手はないかしら？」

やっぱ盗むんじゃん……と思いつつ他の手を考える。

そして僕は思い出した。この学校にはもう一つピアノがあることを。

「体育館だ！　あそこなら盗み安いと思うよ！」

僕の提案に黒猫は頷き、すぐさま急旋回して僕の指差す体育館へと方向転換する。

体育館のステージ裏にはピアノが常置してあるから、それならきっと盗みやすいはずだと少し罪悪感を感じながら体育館へ向かった。

体育館と校舎は校庭を挟んだ少し離れた場所にあり、４隻の宇宙船は校庭に停船した。
４人の宇宙人と僕が体育館の重い鉄の扉の前まで来ると、当たり前のことながら、そこには鎖が巻かれ固く施錠がかけられてあり、簡単に入れなくなっている。

僕がこのままでは入れないと立往生していると、虎縞の猫がいとも簡単に鍵を開けた。
そして隣りで目を丸くして驚いている僕にニヤリと笑いながら一言。

「悪いことをするのも結構楽しいですね……ふふふ」

その三日月型に歪んだ瞳は悪戯をやらかして楽しんでるタチの悪い子供のようだ。
ついさっき、白に少し似てると思ったけど、撤回する。
やっぱり似てないや。

僕の後ろには肩に反物を背負った猫がいた。彼は無口なのか、まだ一言も発していない。耳と手足だけが黒くて体は白色というパンダ柄の猫。瞳の色は濃いブルーだ。
その背中に背負っているモノが気になったが、すぐに扉が開いたので何も訊けずステージ裏まで走った。

真夜中の学校は想像以上に不気味で、暗く静まりかえった体育館は怪しげな雰囲気を漂わせている。
その中に猫のような宇宙人がいるこの状況も不気味だった。

「これがピアノかー」

感嘆の声を洩らしたのは黒猫。

「結構重そうですね」

ピアノに触れ、重さを計っているのは虎縞の猫。

「なーに、こんくらいなんてことないさ。さっさと運んじまおうぜ！」

口の悪い白猫がこう言うと、コクンと頷いたパンダ柄の猫は背負っていた反物をステージの上に広げた。

その広げた反物は縦横約2メートル四方の絨毯のようなものだった。

一体何をしようとしてるのかと僕が立ち尽くしていると、猫たちがピアノを押し始めた。

どうやらあの絨毯に乗せようとしているらしい。

僕は訳が分からなかったが、何もしないわけにもいかなかったので、とりあえずピアノを押すのを手伝った。

ピアノが完全に絨毯の上に乗り終えるとピアノをそのままに、猫たちはさっさとステージを下りていき、流れを掴めてない僕だけが取り残された。

「は？　ピアノ盗むじゃなかったの？」

彼らの後を追いながら間の抜けた声を出してしまった。

すると僕の側にいた虎縞の猫は得意げに言う。

「まぁ見ててくださいよ」

またニヤリと笑い、僕の背中を強引に外へと押す虎柄の猫。

僕はずいずいと体育館から押し出され、他の猫たちもいそいそと体育館の外に出てくる。

そして開け放たれた扉の外から体育館を覗いていると、驚くことにステージ中央に佇むピアノが動き始めたのだ。

ゆっくりと静かに宙に浮いていく。

僕はまた夢を見ているのかと目を擦り、再びその光景をしっかりと眺めた。

ピアノは上下左右に揺れながら僕達がいる体育館入り口を目指して飛んでくる。

魔法か、それとも超能力でも使ったのだろうか、と隣りにいた虎縞の顔を見上てみても彼はまたニヤリと笑うだけだった。

「翔太さん！」

後方から僕を呼ぶ黒猫の声がして振り替えると、黒猫はすでに宇宙船の中に躰半分埋めている。

「翔太さん、早く乗って！」

ふと気づけば白猫もパンダ柄の猫も既に宇宙船に乗り込んでいて円を描くように上空を飛んでいた。

僕も急いで黒猫の宇宙船に乗り込み成り行きを見守る。

一人居残った虎柄の猫はふわりと浮いたピアノが体育館の扉を潜るのを確認すると、扉を閉めて固く施錠をかけた。

それはものの数秒で、あっという間に3隻の宇宙船に追い付くのだから、彼は今世紀最強の大泥棒決定だ。

そして、あの不思議な絨毯に乗ったピアノはいうと、宇宙船に引き寄せられるように僕達の後を追ってくるのだから二重の驚き。

ゆらりゆらりと揺れるピアノはまるで生き物のようだ。

静寂を守っている夜闇にくっきりと浮かんだ三日月。

その淡い月明かりを背景に、４隻の宇宙船と絨毯に乗ったピアノは奇妙な黒い影となって消えていくのであった。

第１５話　花　園

地球を出て何日が経ったのだろう。
朝なのか夜なのかも分からない、右も左も分からない。そんな宇宙の中で僕は混沌とした時間を過ごしていた。

母船はあの小さな宇宙船とは違い、移動してるのも感じさせないくらいの安定した走りをみせていた。

僕が案内されたのは、広い一室。なんら地球にある普通の部屋と変わらない。強いて違いを挙げるなら、窓がないことぐらいだろうか。

この部屋にはベットと机、そして盗みだしたピアノがあるだけで閑散とした部屋だった。
辺りは物音一つせず、人影もない。
そのため集中してピアノを弾けた。
時間を気にせず好きなだけ弾いた。

静寂した中でピアノの音色だけが辺りに響いていく。

だけど限度がある。

この一室に入れられてから僕はずっと一人。
することといっても食事を摂ることと睡眠を摂ること、ピアノを

弾くことぐらい。

時間を持て余していた僕はついに部屋を出た。

ちょっと散歩するぐらいの軽い気持ちで長い廊下を歩く。

終わりが見えない廊下に僕の靴音だけが響いた。

右を曲がっても同じ風景が続いているだけ。

白い廊下に水色の壁。等間隔にオレンジ色の照明が灯っている。

壁に触れると、あの小型宇宙船同様、カシカシと音を立て、硬化していった。

やはり造りはあの宇宙船と同じらしい。

長い時間、宇宙を浮遊するわけだから特別な構造になっているのは当然のことだろう。

宇宙船やあの魔法の絨毯は浮遊石と呼ばれる鉱物が原料になっているんだとか。

歩いて歩いて……いつの間にか迷っていた。

どこまで行ってもまた同じところをグルグル回ってるいるだけのような気がして、狐につままれた気分だ。

母船は一つの街を飲み込んでしまいそうなくらい巨大な宇宙船なのだ。

迷ったら部屋には帰れないぞ？

――どうしよう……

どうにかこうにか元の部屋へ戻ろうとしてもっと迷い込んでしまう。周りには道を尋ねる人影もない。

僕の額にはじわりと汗が滲んでいた。

僕は壁に手をつきながらよたよたと歩いていると、ある一室の前で足を止めた。やっと壁じゃないものを見つけたのだ。

両開きの扉。ノブは付いていない。

僕が扉の前に立つと扉はグィーンと音を立て自動的に開いた。

――あ、開いた……

「すいませーん、誰かいますかー？」

心細い声で尋ねてみるがシーンと静まりかえっていて応答はない。

中を覗きこむとまた扉があるだけで他には何もない。ただ微かに甘い、良い香りがした。

とにかく誰かを探さなくてはと奥へと入り、一つしかない扉の前に立つ。するとまた自動的に扉は開いた。

「うわ――っ」

僕は感嘆の声を漏らした。

そこは部屋一面お花畑。広さにして３０畳ほどだろうか。床は茶色の土が敷き詰められていて足の感触は柔らかい。

天井からは太陽のような明かりが花たちを照らしていた。

僕が先程感じた良い香はラベンダーの香りだった。

他にも薔薇、百合、秋桜、牡丹、菊、向日葵、紫陽花、蘭、チューリップ、ガーベラ、パンジーなどが咲き、種類は様々だ。

季節なんて関係ない。四季折々の花々たち。

――どうしてこんなものが此処にあるんだろう？

僕が首を傾けていると背後から声がした。

「此処にいましたか……、探しましたぞ？」

そう言って入り口に立っていたのは総司令官殿だ。

僕に多くのことを教えてくれた人。彼がいなかったら僕は何も知らないまま白と別れていただろう。

彼には感謝しなければならない。

「綺麗な場所でしょう？」

彼は一面の花畑を眺めながら言った。

「はい。鮮やかですね」

僕も花畑を眺める。

「――他には何も感じない？」
「え？」
「これ全部、地球の花なんだよ？
隣の部屋には野菜もある。
悪いこととは思いながら、地球から少しずつ盗みだしたものなんだよ」
彼は自嘲ぎみに笑った。
いけないことだと知りながら、やらなければいけないこと。
彼らが生きくためには仕方のないこと。
僕に彼らを責める理由なんてどこにもない。
「これは私たちのエゴだよ。この花たちにしてみたら、自然にかえしてやるのが一番いいに決まっている。
こんな四角い部屋（はこ）に入れられて、さぞ窮屈な思いをしているだろう。
けど、私たちにとっては唯一の花園なんだよ。
ここは唯一自然と触れ合える場所なんだ。
こんな四角い空間が自然だなんて、君からしたらおかしな話だろう？」
彼はまた自嘲ぎみに笑う。
僕は首を大きく横に振った。

この気持ちはなんだろう。
すごく淋しい気持ちになった。
爛漫と咲き誇る花たちもどこか寂しげに見えるのは僕だけだろうか。

「いつか、本当の自然に帰してあげれる日が来ますよ」
それは今の僕が言える最大の励ましの言葉。
「そんな日が来たらいいね……」
彼は花たちに優しく微笑みかけるが、どこか哀しげ。
僕も赤や黄色のチューリップを眺める。

そこに浮かんだのは白の顔。そして目を閉じると聞こえてくるのは白の声。
白は言った。
僕には環境がある。自由も時間もあると――。
それはつまり、自分たちにはないと言っていたのだ。
この花たちはその象徴だ。

「あの、地球を出てからどれくらい経ったんでしょうか？」
目の前の花たちを我が子を見るような優しい眼差しで眺めている彼。
彼は視線をそのままに答えた。
「6日だよ」
6日……もうそんなに時間は過ぎたのかと言葉なく驚いていると、彼が続けて言った。
「もうすぐ星に着きますよ。実はそれを君に伝えようと思って部屋を訪ねたんだがね、君の姿が見えなくて随分探したよ。――不安だったかな？」
彼は穏和な微笑を見せた。
「……はい。正直いうと不安でした」
僕は頭を掻いて苦笑した。
「――翔太さん」
彼は真顔で僕を見つめる。
何か言いたげな様子に、僕はハイとだけ返した。
「白王子のために、よくぞこんな遠くまで来てくれましたね。
あなたの勇気に感謝します」

――僕の勇気に感謝？

思ってもみない言葉だった。彼に何と言葉を返していいか分からなかった。

ただ僕を見つめる彼の瞳は憂愁の色で溢れて、やはり白の容体は深刻なものなのだと実感せざるをえなかった。

「――あのっ！」

聞きたくないけど信じたくないけど、聞かなければならない現実。

「白がもう長くないって本当ですか！？」

僕のその問いに彼は目を閉じた。

そんな彼の様子は少なからずとも僕の不安を掻き立てて、胸の中に蓄積されていく闇の屑。

「以前に悪疫が流行っていると話しましたよね？」

「はい」

「タチの悪い病気です。熱にうなされ、食欲は低下し、脱水症状をひきおこす。毎夜悪い夢にうなされる。

王子もまた、その悪疫の餌食になってしまったのです」

肩を落とし俯く彼。

「その悪疫に対処する方法はないんですか？　なにか治療法は！？
薬は！？　何かあるでしょう！？」

僕は襲い掛かってくる死の恐怖に押し潰されそうになるのを必死で堪え、彼にしがみ付き訴える。

けれど彼は目を閉じ、僕と目を合わせてくれない。

横に振られた首。

それは手の施しようがないという残酷な答えだった。

「そんな……っ」

僕は地面に力なく崩れ落ちた。

「だからあなたをここに連れてきたのです。
せめて安らかな最後を送らせてあげたいと思ったから」

――最……後……

彼のその言葉は僕を奈落の底へと突き落とした。

それからのことはよく覚えていない。
どうやって部屋に戻ったのかも、いつ星に着いたのかも――

僕を正気に戻してくれたのは皮肉にも真っ暗な闇だった。

僕の目の前に佇むのは巨大なお城。
それは近代的な建物で映画で観たＳＦの世界だ。まばゆいばかりの明かりを放出したお城は夜景のように綺麗で一見豪華に見える。けれどカタンカタンと規則正しく動く機械の音は無機質な印象を与えた。
お城の周辺を小さな小型宇宙船が浮遊している。

――なんか……この星、おかしい……

こんなに立派な未来型のお城があるのに、大地は干上がった田んぼのように枯れている。灰色の地面と闇だけの世界。
その一方では重装備な漆黒の巨大母船とこの近未来な造りのお城。
とても不釣り合いな気がした。

黒猫に案内されながら廊下を歩く僕は恐縮しきりだ。
なぜなら廊下にはたくさんの猫たちが整列し、頭を下げているのだ。
重々しい空気の中を歩く僕。
正直、胸が痛かった。

だって僕は、ただの地球人だよ？
全然偉くもないし、親父みたいに人の役に立つようなこともしたことない。

そうだよ！僕なんかより親父を連れてきた方がよかったんじゃないか！？

だって医学のプロじゃないか！！
もしかしたら白を助けられるかもしれない！！

どうして気付かなかったんだろう……。
僕なんかよりずっと……

「翔太さん？　白王子はね、あなたに会いたがっているんですよ？」

僕の後ろを歩いていた虎柄の猫が囁いた。

「ほんと、いつまでも後向きな奴やなー」

虎柄の猫の隣を歩く白猫が不機嫌そうにぼやき、それに頷くパンダ柄の猫がその後ろを歩く。

――え？　今、何て……？

僕、一言も口には出してないよね？

胸の中で思っただけなのに、なんで分かったんだろう？

まさか透視能力！？

まさか……ね……

僕は振り返り猫たちの顔を伺う。

すると虎柄の猫はしまったっと言わんばかりに額に手をやり、白猫は気まずそうに目を上へと泳がせている。

パンダ柄の猫は何もなかったかのように平然と前を見て歩いていた。

やっぱりコイツら僕の心を読んでいる！

僕が警戒心たっぷりの視線を後ろの三人に送ってやった。すると前を歩いていた黒猫の足がぴたりと止まる。

「ここです」

大きな両開きの扉の前。

僕は複雑な思いで扉を見上げた。

この奥に白はいる――

第１６話　夜想曲

広い部屋の中央に天井から垂れ下がった薄い幕。
その幕に仕切られた中には大きなキングサイズのベット。
白はそのベットの上で寝ていた。

茶褐色の壁は重厚な雰囲気を醸し出し、和やかな印象を与える。
しかし部屋の空気は冷たく、ピンと張り詰めた緊張感を漂わせていた。

天井近くまで広がった大きな窓は闇を映す鏡だ。どこまでも続く暗闇は彼らの希望をも飲み込んでいく。
また一人、そしてまた一人とその餌食になっていく家族や仲間たち。
いつ自分にふりかかるか分からない恐怖。
大切な人をなくす悲しみ。
闇の勢いは増すばかり。

そして白という名の王子もまた、その犠牲者の一人だ。

その部屋の中では側近たちが少し距離をおいて王子を見守っている。
その数２、３０人はいるだろう。
勿論、この部屋まで案内してくれた黒猫、それから虎柄の猫、白猫、パンダ柄の猫の顔触れも揃っている。

廊下は部屋に入れない者たちで溢れ、群れができていた。

僕はそっと白の手を握った。
その手は燃えているかのように熱い。

白に会ったら元気づけてやるつもりだった。
何やってんだって、らしくないよって言ってやるつもりだった。

――だけど、

白を見た瞬間、ぽろぽろと大粒の涙が零れた。

自分でもびっくりした。
泣くつもりはなかった。
だけどあまりにやつれ、苦しそうに顔を歪めた白を目の前に、涙をとめられなかった。
元気だしてなんて、とても言えない。

全身を覆う柔毛に以前のような艶はない。

花園で彼が言った“最後”の二文字が頭を掠めた。

僕はその二文字を頭から叩きだすように、必死で涙を拭った。

震える唇をぐっと噛み締める。
必死で笑顔を作る。
うまく笑顔になっているかは自信ない。

「白、僕だよ？　翔太だよ」

白の瞳は開かない。
「白……」
僕は神に祈る気持ちで白の名を呼んだ。
「白……？」
その気持ちが神に届いたのだろうか、握っていた手が微かに動いた。
僕はその手を力強く握り返し、そっと話し掛ける。
「僕ね、またピアノを始めたんだ。
白の言うとおりだった。
小さなことに拘って、ずっと下を向いて歩いてた。
逃げてたんだ。
時間を無駄にしていた。
そんなことしたって、何も変わらないのにね。
やっぱ、下ばかり向いて歩く人生なんて嫌だよ。
前を向いて生きていきたい。
一生懸命もがいてみるのも結構いいもんだね？
あの時はひどいことを言って、ごめんなさい……」

――ごめんなさい。

やっと言えた。

やっと謝ることができた。

君と離れる前に僕がもっと素直になれていたなら、こんなに時間はかからなかっただろう。

「白、聴いてくれる？　君に聴かせたい曲があるんだ」

ベットから少し離れたところにピアノはスタンバイしてあった。

僕は鍵盤の前に座る。

そっと鍵盤の上に手を乗せた。

周りにはたくさんの側近たちが壁に沿うように立ち並び、白と僕を静かに見守っている。

誰一人口を開かない。

誰一人微動だにしない。

なんとも言えぬ緊張感。

僕の手は震え、指は動かない。

一旦、鍵盤から手を放す。

震えるな、僕の手！

静まれ、僕の心臓！

僕は大きく息を吸い込んで緊張を吐き出し、再び鍵盤に手を添えた。

ポロン……

その瞬間、僕の指から奏でられた音符が踊りだした。

優しく響くその音色は僕の手を伝い部屋中を温かく包みこむ。

静寂しきったこの星の遥か遠くまで響き渡る音符。

僕は目を閉じ、君を思う。

今、君に聴かせたいのはこの曲――

『夜想曲』

夢想的で幻想的な甘い旋律――

白、聞こえてる？

僕の奏でた音色は何色だろう？

幾重にも重なった装飾音は、あの夜見上げた桜のよう――そう思わない？

白は僕にいろんなことを教えてくれた。

当たり前の大切さ、家族の大切さを教えてくれた。

夢を持つ勇気をくれた。

たくさんの“ありがとう”をくれた。

今度は僕がたくさんの“ありがとう”をあげる番だ。

こんな僕の友達になってくれてありがとう。

本気で叱ってくれてありがとう。

本気で心配してくれてありがとう。

大切な時間をくれたこと、ありがとう。

白、ありがとう。

――ありがとう。

夢見るような旋律は終わりを迎え、優しい音色は爽やかな春風の余韻を微かに残して消えていった。

僕は全てを出し切ったせいで放心状態。
しばらく立ち上がることができず、鍵盤の前に座っていた。

周りの猫たちがどのような想いでこの音色を聴いていたかは分からない。
ただ、青や黄色の瞳は濡れていた。

僕は皆の心に優しく響いてくれていたらいいなと願った。

時間(とき)が止まったような静けさはどのくらい続いただろう。

僕の知らないところで事態は急展開をみせていた。

バタバタと慌ただしく走る何者かが徐々に部屋へと近づいてくる足音。

廊下にできた群衆を掻き分け、部屋へと飛び込んできたのは茶色の猫で、ハァハァと肩で息をし、ひどく動揺している様子。

「たい……たいへ……です！」

息があがってうまく思いを伝えられないようだ。

「何をそんなに慌てている？　此処は王の御前にて……」

「大変なんですよ！！」

大勢いる中の一人が慌てふためいている茶色の猫を嗜めようとするが、最後まで言い終える前に茶色の猫に遮りられた。

そして茶色の猫がこう告げる。

「風が吹いているんです！　――虹の風が吹いているんですよ！！」

ゴクリと唾を飲み込んで叫んだ彼の声に、その場にいた全員の顔色が一斉に変わった。

第１６話　夜想曲（後書き）

次回、最終話です。

最終話　ありがとう。の一言

地球から何万光年と離れた小さな惑星には猫のような星人が暮らしている。

この星には彩(いろ)がない。あるのは深い闇だけだ。

昔はこんなんじゃなかった。青い海こそなかったが青い湖があった。川が流れてた。

夜のこないオレンジの空には紅い月が一日中、大地を見下ろしていた。

空には鳥がはばたき、澄んだ河川には威勢よく飛び跳ねる魚たち。

年中、爽やかな風が吹き、花の種を運んでは大地を華やかに彩った。

彼らはその風を虹の風と呼んでいた。

ゆっくりと流れる時間(とき)の中で彼らたちの笑い声が響き、歌い踊った。

そんな彼らの日常を変えたのは科学という未知の分野だった。

ある日、偶然見つけた鉱物がきっかけだった。

――浮遊石。

彼らは新しく発見された物質の性質や原理を研究し、応用していった。

そして少しずつ生活は変わっていったのだ。

歩かなくても自動的に目的地まで運んでくれる椅子、重い物を無体積にしてくれる絨毯、簡約化されていく食生活。
便利になればなるほど、彼らの生活は堕落していった。

そんな生活に未来などあるはずがない。

けれどその時の彼らは誰一人気付いていなかった。

新発見に快感を覚え、何かに取り付かれたかのように研究に没頭していく彼らたち。

そしてあの母船や小型宇宙船の完成をみた頃、彼らはようやく気付く。

オレンジ色の空は深い闇となり、大地も湖も枯れ果て、鳥も魚もいない。

この星を成り立たせていた虹の風さえも吹いていないことに、ようやく気付いたのだった。

風がやんでいる……

それはつまりこの星の死を意味する。

いつからだろう……
いつから風はやんでいた？
いつから闇はそこにあった？
何がいけなかった？

なぜ……
なぜ……

空を見上げることを忘れ、花や鳥たちと会話をしなくなった自分たちに、それを知るすべはない。

もうあの風が吹くことはないだろう。
これは神が下した戒めなのだ。
ならば死ぬ覚悟で受け入れよう。
そう思っていたのだ。

「大変です！　風が吹いているんです！　虹の風が吹いているんですよ！！」

突然部屋に飛び込み叫ぶように言った彼の一言は、その場にいた全員を驚愕させた。

「虹の風が！？」
「嘘だろ！？　信じられん！」
「本当なら、私たちは救われる！」

沈黙を守っていた空気は騒つきだし、それぞれが思い思いを口走り窓辺に集まりだす。
その真実をこの目で確かめたいとでもいうように窓辺に群衆ができた。

そしてその中の一人が窓を開けた、その瞬間――

ふわっ……

ふわりと爽やかな風が彼らの顔を通り過ぎっていき、その風は寝ている白にまで届いた。

透き通った何色とも言い表わせないオーロラのような風は、移動しながら色を変えていく。

まさに虹のような風。

キラキラと細かい光を落としながら自由に飛びかっていく。

「あぁ……」

誰かが嗚咽まじりに崩れ落ちた。

夢をみているようだと呟く吐息まじりの声がどこからともなく聞こえてくる。

歓声を揚げて抱き合う者もいれば、喜びのあまり外廊に飛び出す

者もいた。

何も知らない僕だけが呆然とピアノの前で座っている。

そんな僕とは関係なく窓の向こうの景色は幻想的な世界観を造り上げていった。

時間(とき)が早送りで駆けていくように、次々と重ねられていく彩(いろ)。

風によって蒔かれた種は芽を出し、葉を広げて伸びていく。

膨らんだ蕾は大輪の花となり、その色香に誘われた蝶たちが舞いだした。

大空を深い闇にした暗雲は風によって吹き飛ばされ、紅い月が顔を出し、枯れた湖には澄んだ水が沸きだす。

流れだした川はチョロチョロと音をたて、下流へと進んでいった。

虹の風はまるで羽衣を身に纏った天女の舞のようで、その全てに生命を吹き込んでいったのだ。

そんな夢心地な時間から現実へと戻したのは黒猫の声だった。

「王子ー！」

黒猫は白の傍で驚喜の声をあげた。

僕は何事かとすばやく駆け寄り白の顔を覗き込むと、白はゆっくりと瞳を開げ、僕を映す。

あの黄色の瞳だ。

黄色の一言で片付けるには勿体ないくらいの綺麗な瞳。

透き通ったビー玉のような瞳に、何度吸い込まれそうになっただろう。

もう見ることはできないかもしれないと覚悟していた黄色の瞳は今、目の前で確かに僕を捕えている。

「白―！！」

僕は嬉しくて、考えなしに白に抱きついていた。

「翔太……」

頭上から白の声がして、僕の背中に白の手が乗った。

「これは……どうしたことでしょう？　みるみる身体が軽くなって、毒が抜けていくようです」

数か月ぶりに聞いた白の声は戸惑いをみせながらも、久しぶりの安らぎを噛み締めてるかのようでもあった。

「翔太さん、あなたのおかげですよ！　あなたがこの星を救ってくれたんです！　あなたの奏でた音色が王子を救ってくれたんですよ！」

黒猫の、涙まじりの声。
その涙は悲しみの涙なんかではない。
それは――喜びの涙。
周りにいた猫たちの視線が一斉に僕に集まった。
そんな中、黒猫は続ける。
「きっと虹の風はあなたが奏でた音色に誘われてやってきたんですよ。
風はあなたのその手によって導かれた。
そして導かれた虹の風は本来あるべき星の姿を甦らせてくれた。
そして王子に取り付いた悪疫さえも追い出してくれたんです！
きっと、そうに違いありません！」
黒猫が流した涙が床に落ちた。一粒、二粒と……。
「ただの偶然じゃ……」
「偶然なんかじゃありません」
僕が最後まで言い終える前にそれを遮ったのは虎柄の猫。
彼は群衆の中から2、3歩前に出てくると僕に言った。
「思い返せば、この星には音色などなかった。そんなものは大切ではないと思っていたから。
きっとあなたが此処に来てくれなかったら私たちは一生気付かずに滅んでいったでしょう」

僕があの虹の風を呼び寄せただって？

僕の演奏が……？

そんなことを言われても信じられない。

「音楽か……。そんなこと考えもつかなかったな……。いつしか会話が少なくなって、笑い合うことを忘れた俺たちには確かに無縁だった……」

独り言のように呟いたのは白猫。

以前のような荒々しい雰囲気は感じない。

目の前の真実を真摯に受けとめようとしている。

そして他の者たちも同様であった。

何十人といる群衆の中から、ゆっくり前に出てきたのは杖をついた老猫。

その猫が白に言った。

「王子、なぜこんな簡単な答えが分からなかったのでしょう？

鳥の囀りや川の流れる音に癒された時代を思い出していれば、すぐにこの答えを導きだせていただろうに……」

その言葉は全員の心に深く染みたようだ。

自分たちの愚かさ、傲慢さをひどく後悔したように苦々しく俯い

ている。

そして老猫の言葉を受けた白が上半身を起こすと、視線を一周させて言った。

「そうですね……この星に必要だったのは、科学の力なんかではない。必要だったのは――心を癒してくれる音色だったのですね。どんなに便利な道具を作っても、過信してはいけない。忘れてはいけないものがある。
あの虹の風は、そう教えてくれていたのでしょう。

そしてそれに気づかせてくれたのは翔太、あなたです。
あなたが私たちの目を覚まさせてくれた。
私たちに欠けていたものを教えてくれた。心から礼を言います。――ありがとう」

白は傍に立っていた僕の右手をとり、まっすぐな瞳で僕を見上げると礼を述べた。

白にその言葉を貰ったのはこれで何度目だろう。

その言葉を受けるのは僕じゃないのに。

「それは違うよ。もし本当に、僕が弾いたピアノがあの風を呼んだのだとしたら、それは白のおかげだ。
なぜなら僕に音楽を取り戻させてくれたのは君だから。
もし君が僕の前に現れなかったら、僕は再びピアノに触れることはなかったと思う。夢を持つこともなかったと思う。ひねくれた子供のまま、大人になっていたと思う」

今までの白との思い出が涙と共に溢れだす。
声が震えるけど、最後まで自分の思いを伝えなければいけない。
僕は涙を吹いて声を振り絞った。
「白、礼を言わなければいけないのは僕の方だ。
――白、ありがとう」
やっと言えたこの一言。
白は優しく微笑み返してくれた。
その場にいた全員が温かい眼差しを向けて見守っている。
虹の風が僕たちを優しく包んだ。

――数日後。

僕と白は緑が広がった草原に立ち、紅い月を見上げていた。
目の前に広がる湖の水面には紅い月がくっきりと写っている。

「明日、地球に帰るよ」

僕と白の間を風がすり抜け、草たちはサァーと音を立てて揺れた。

「地球まで見送りに行きたいところですけど、私は此処を離れるわけにはいきません。許してくださいね」

「分かってるよ。白はもう王子じゃなくて王なんだもんね。あ、そういえば此処でも白って名前使ってるんだね。みんな白王子って呼んでたから」

僕の前に突然現れた黒猫や他の者たちもそう呼んでいた。そして即位式を終えた今は白王と呼ばれている。

「私が望んだことです。名前があるっていいですね。
皆も気に入ってましてね。どうやら私の初仕事は皆に名前を与えることから始まりそうです」

白はそう言って笑った。

「大変そうだね」

僕も笑う。

一息ついた白が月を見上げた。

「翔太を無事に送り届けたら、あの宇宙船は全て壊します。

あの宇宙船は此処にあってはいけない物ですから」

つまりそれは僕たちの永遠の別れを意味する。

あの宇宙船がなくなれば白たちは二度と地球に来ることはない。

けれど僕はそのことを自然と受けとめることができた。

きっと白ならそうするだろうと分かっていたから。

「白、元気でね」

「翔太もお元気で」

僕たちは丸く紅い月の下で、堅い握手を交わし笑顔で別れを告げた。

それから月日は経ち、僕は5年目のクリスマス・イヴを迎えている。

見上げた空は生憎の曇り空。

「あー、また空見上げてるー！　ほーんとへんな癖なんだからっ」

僕の隣りで呆れ顔の女性(ひと)は、今の僕にとって一番大切な女性だ。

彼女とは同じ音大で知り合って、一緒にクリスマスを過ごすのはこれで3度目になる。

僕は来年の春、大学を卒業し、イタリアのミラノにある大学にピアノ留学することが決まっていて、彼女には寂しい想いをさせるだろうけれど、彼女は僕を待っていると言ってくれた。

こういうの信頼っていうのかな。信頼し合えるって素晴らしいことだ。

僕達は家から近い商店街を歩いていた。

街は赤や緑のイルミネーションで飾られ、どの店からも聞こえてくるのはリズミカルなクリスマスソング。

「今夜は雪かもな……」

「ほんとー！？　ホワイトクリスマスになる？　さすが毎日空を見てるだけあるね。天気まで分かっちゃうんだ？」

「いや、テレビの天気予報で言ってた」

「なんだ、もうっ……」

彼女からよく指摘される僕の癖。

それは自分でも無意識に空を見上げてしまうこと。

別に白を探してるわけじゃない。もう二度と逢うことはないと分かっている。

けれどこの癖だけは抜けなくなっていた。

「ケーキ買っていく？」

ケーキ屋の前を通る頃、彼女が訊いてきた。

「いいよ、姉ちゃんが用意してると思うし」

「じゃあこのサンタの飾りだけでも買っていこうか？　未来（みき）ちゃんが喜びそうだよ」

彼女はケーキ屋の店先に並んだ小さなサンタの菓子細工を指差した。

トナカイに引かれたソリの上のサンタだ。

「そうだな、未来に買って行くか」

未来とは、５歳になる僕の姪っ子。

僕が地球に帰ってからすぐに産まれた姉ちゃんの子供だ。

予定日よりかなり早く産まれたが、元気よく育っている。

――白、あの時君が救った生命はすくすくと成長しているよ。

今日は我が家で多くの友人たちとクリスマスパーティ。

皆の目的は小さな未来ちゃん。

未来は僕の友人たちの間ではアイドル的存在になっていて、その友人のうちの誰かが僕の家でクリスマスパーティーをすると言いだしたのがきっかけだった。

「ごめんな？　折角のイヴに野郎たちの勝手なわがままに付き合わせちゃってさ……」

「ううん、大勢でわいわいやるのも楽しい！　未来ちゃんにも会えるし嬉しいよ！」

僕は大学でたくさんの友人たちと出会った。冗談言ったり、悩みを相談したり、一緒に酒を飲んで酔い潰れたりと楽しい大学生活を送れたと思う。

僕がこんな風に笑い合える仲間を作ることができたのも君のおかげだ。

――白、ありがとう……

今でも君は僕の大親友だ。

この先どんな未来が待ち受けているは分からないけど、僕がもっと大人になって新しい家族を作ることができたら、その時は話そうと思っているんだ。

僕に『ありがとう』の一言をくれた君のことを。

どうかその相手が、今僕の横を歩く大切な女性（ひと）でありますように

――――

おわり

最終話　ありがとう。の一言（後書き）

はじめまして、作者の香です。最後までお付き合い頂いた方々には本当に感謝致します。　　誤字脱字、へんな日本語も大変多くお見苦しい点につきましては反省で一杯です！（涙）

しかし、無事に最後を迎えることができたことは本当によかったァ：（自己満足デス。スイマセン）

最後に、作者からも一言、言わせてください。

「こんな駄作に付き合って下った皆さん、ありがとうございました！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4426b/

ありがとう。の一言

2010年10月24日03時51分発行